

盛岡市内遺跡群

—令和3年度発掘調査報告書 I —

二又遺跡 第16次

2024. 3

盛岡市教育委員会

盛岡市内遺跡群

—令和3年度発掘調査報告書 I —

二又遺跡 第16次

2024. 3

盛岡市教育委員会

序　　言

盛岡市は、北上平野を縦断する北上川と、その東西に位置する北上山地と奥羽山脈のそれぞれから流れ出る中津川・零石川との合流点に位置し、雄大な岩手山や姫神山を望む約30万人の人口を抱える岩手県の県都です。北東北の拠点都市として緑豊かな環境と高度都市機能の調和したまちづくりを目指しています。

市内には、旧石器時代から江戸時代まで、789箇所の遺跡が存在します。その中には、国・県・市指定の史跡として保存・活用が図られているものもありますが、各種開発等によって姿を変え、消滅していく遺跡があることも事実であります。

盛岡市では、文化財保護の立場から、国の補助を受け市内各地の個人住宅建築に伴う調査を継続的に実施しており、当市の歴史を紐解くうえで、大変貴重な成果を上げております。

本書は、令和3年度に実施した市内遺跡群の発掘調査報告書であります。市民の皆様の地域理解の一助として、また学術的な研究資料として広く活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大なる御指導や御助言を賜りました文化庁文化財第二課、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課、発掘調査に御理解と御協力を頂いた地権者各位及び地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和6年3月

盛岡市教育委員会

教育長 多田 英史

例 言

- 本書は、令和3年度国庫補助事業「盛岡市内遺跡群」の発掘調査報告書である。
- 本書は遺構及び遺物の実測図などの資料呈示を意図して、編集と執筆を鈴木俊輝が、執筆を今野公顕、佐々木あゆみが担当し、菊地幸裕、津嶋知弘、神原雄一郎、花井正香、今松佑太、杉山一樹、田老西理、浜谷佑、羽澤圭織が協力した。
- 遺構の平面位置については、過去の調査との整合性のため日本測地系を用い、平面直角座標系X系を座標変換した調査座標で表示した。なお、方位は座標北を表している。

二又遺跡　　調査座標原点 X - 36.000.000 m Y + 24.000.000 m = RX ± 0.000 RY ± 0.000

- 高さは標高値をそのまま使用している。
- 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使い分けた。土層記述は層理ごとに本文で記述又は表に記載し、個々の層位については削除した。なお、層相の観察にあたっては「新版標準土色帖」(2013 小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業㈱発行)を参考にした。
- 遺構の名称及び記号は次のとおりである。

遺構	記号	遺構	記号
堅穴建物跡	R A・R E	土坑	R D

- 二又遺跡の遺構番号は、公益財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査遺構番号との整合を図り、3桁の遺跡内連続番号とした。
- 本書中の地図は、国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1「盛岡」「矢幅」の地形図を使用し、10万分の1に縮小・編集したものを作成している。
- 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。
- 本調査の一部については発掘調査成果報告会や速報展等で報告・発表しているものがあるが、本書の記載内容をもって訂正する。

11 調査体制 ～令和3年度～令和5年度～

[調査主体] 盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一 (～R3年度)、多田 英史 (R4年度～)
教育部長 岩市 和敏 (R3年度)、渡邊 猛 (R4年度～)

教育次長 川原 善弘 (R3年度)、工藤 浩統 (R4年度)、下田 法子 (R5年度)

[調査総括] 歴史文化課 遺跡の学び館

課長兼館長 割船 活彦 (～R4年度)、高橋 智巳 (R5年度)

館長補佐 大森 勉

[調査] 文化財副主幹 菊地 幸裕、津嶋 知弘、神原雄一郎 ※小屋塚遺跡 (調査・整理)

文化財主査 今野 公顕 ※二又遺跡 (調査・整理)、花井 正香

文化財主任 鈴木 俊輝

文化財主事 今松 佑太、杉山 一樹※二又遺跡 (調査)

田老 西理 (R5年度)

文化財調査員 佐々木あゆみ ※二又遺跡 (調査・整理)、浜谷 佑、室野 秀文 (～R4年度)、羽澤 圭織 (R5年度)

[管理・学芸] 主任 杉浦 雄二

文化財調査員 伊藤 聰子

学芸調査員 千葉 貴子、樋下 理沙

[発掘調査・室内整理作業]

秋元理恵、阿部真紀子、阿部理絵、佐々木富士子、佐野光代、鈴田英治、鈴田千佳、樋口泰子、平川慈樹、

細田幸美、村上美香、山田聖子

[地権者・助言・調査協力]

上田祐泰、岩手県教育委員会

(五十音順、敬称略)

目 次

序 言	
例 次	
目 次	
表 目 次	
挿 図 目 次	
写 真 図 版 目 次	
I 令和3年度発掘調査の概要	1
II 二又遺跡（第16次調査）	5
写 真 図 版	
報告書抄録	

表 目 次

第 1 表 令和3年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1
第 2 表 二又遺跡調査一覧	7
第 3 表 二又遺跡第16次調査 遺構別出土土器破片分類集計	14
第 4 表 二又遺跡第16次調査 土層観察表	15~17
第 5 表 二又遺跡第16次調査 出土遺物一覧	17~19

挿 図 目 次

第 1 図 地形分類と周辺の遺跡分布	3
第 2 図 二又遺跡の位置（1:100,000）	5
第 3 図 二又遺跡全体図	8
第 4 図 二又遺跡第16次調査全体図	9
第 5 図 遺構ごと出土坏の法量分布図	14
第 6 図 R A 029 壓穴建物跡	20
第 7 図 R A 029 壓穴建物跡断面図	21
第 8 図 R A 030・031 壓穴建物跡、ビット	22
第 9 図 R A 030・031 壓穴建物跡、ビット断面図	23
第 10 図 R E 08 壓穴状遺構、R D 028 土坑	24
第 11 図 R A 029 壓穴建物跡出土遺物（1）	25
第 12 図 R A 029 壓穴建物跡出土遺物（2）	26
第 13 図 R A 029 壓穴建物跡出土遺物（3）	27
第 14 図 R A 030 壓穴建物跡出土遺物（1）	28
第 15 図 R A 030 壓穴建物跡出土遺物（2）	29
第 16 図 R A 030 壓穴建物跡出土遺物（3）	30

第 17 図	R A 030 堪穴建物跡出土遺物（4）	31
第 18 図	R A 031 堪穴建物跡出土遺物	32
第 19 図	R E 08 堪穴建物跡出土遺物（1）	33
第 20 図	R E 08 堪穴建物跡出土遺物（2）・R D 028 土坑・遺物包含層出土遺物	34

写真図版目次

第 1 図版	二又遺跡第 16 次調査区遠景、二又遺跡第 16 次調査区全景、RA029 堪穴建物跡、RA029 堪穴建物跡カマド、RA030 堪穴建物跡、RA030 堪穴建物跡カマド、RA031 堪穴建物跡、RE08 堪穴建物跡
第 2 図版	RA029 堪穴建物跡出土土器、RA030 堺穴建物跡出土土器、RA031 堺穴建物跡出土土器、RE08 堪穴建物跡出土土器、土製品・石製品・鉄滓、RA029 堪穴建物跡出土墨書き土器、RA029 堺穴建物跡出土土器底面、RA030 堺穴建物跡出土鉄鎌

《遺物の表現について》

(1) 土器

- a 土器の区分は、須恵器、あかやき土器、土師器に大別した。
- b 土器の実測図・拓本の縮小率は 1/3 とした。
- c 掘図の配列については、器種・器形・出土層位でまとめた。
- d 稜線・沈線は実線・破線で表現し、陰影は表現していない。

(2) 土製品、石製品、鉄製品

- a 土製品、石製品、鉄製品の縮小率は 1/3 とした。
- b 石製品の自然面はドットで表現した。

(3) 掘図中の記号・番号は遺物の出土位置及び出土層位を表している。

(例) R A 369 B 層 → R A 369 堪穴建物跡内埋土 B 層より出土

(例) G 9 - B 21 VI 層

↓ ↓ ↓
※1 ※2 ※3

*1 調査標原点 R X ± 0 R Y ± 0 を起点として、X・Y 両軸を 50 m ごとに区切る大グリッドを設定し、X 軸線上を西から東へ A・B・C…W・X・Y (東から西への場合は -A・-B・-C …-W・-X・-Y)、Y 軸線上を北から南へ 1・2・3…23・24・25 (南から北への場合は -1・-2・-3…-23・-24・-25) と付し、北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組み合わせを大グリッドと呼称した。

*2 大グリッドを 2 m ごとに細分割し、小グリッドを設定し大グリッドの呼称を再び用いた。よって大グリッド-小グリッドという組み合わせで、遺物の平面出土地点を 2 m ごとに表示した。

*3 遺物の出土層位を表している。

《遺構の表現について》

遺構の掘図中、説明する当該遺構については実線で表現した。また、説明遺構と切り合った遺構については一点鎖線、オーバーハング及び推定線は破線で表現した。

I 令和3年度発掘調査の概要

1 令和3年度事業の概要

発掘調査 令和3年度は、発掘調査・試掘調査をあわせて26件実施した（学術調査・現状変更除く）。このうち国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は本調査3件である（第1表）。本書では二又遺跡のみ掲載し、小屋塚遺跡・里館遺跡については別途令和6年度に報告書を刊行する。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
小屋塚遺跡（第45次）	盛岡市大新町10-8	21.04.19～05.31	65.15m ²	個人住宅建築
二又遺跡（第16次）	盛岡市下飯岡1地割56-14	21.10.18～12.06	201.4m ²	個人住宅建築
里館遺跡（第68次）	盛岡市天昌寺町423-6	21.05.13～06.09	104.5m ²	個人住宅建築

第1表 令和3年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

2 盛岡の地形・地質

盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山（標高2,038m）を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地形・地質に大きく影響を及ぼしている。

北上山地 北上山地は日本列島の中でも形成年代の古い地層が分布する地帯であり、古生代や中生代の堆積岩及び火成岩からなる。これまで、北上山地の地質を南北に区分する境界断層帶は早池峰構造体と呼ばれていたが、近年の研究によって地帯区分の整理が進み、現在、北上山地の地質はその構造史より、北部北上帯、南部北上帯とその間に分布する根田茂帯の大きく三つに分けられる。盛岡市東部は根田茂帯の西縁にある。これらの山地縁辺には、中津川・梁川などの北上川水系の河川やその支流により浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。

盛岡市北東部を流れる中津川は、その最大支流である米内川と盛岡市浅岸付近で合流して水量を増し、市街地を西流して北上川と合流する。梁川は盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる岩神山（標高1,103m）の西斜面より流れ、最大支流である根田茂川と盛岡市水沢付近で合流し、閉伊街道（宮古街道）に沿って蛇行しながら、盛岡市東安庭付近で北上川と合流する。その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘を形成する。

奥羽山脈 奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含まれられる。零石川は奥羽山脈より東流し、零石盆地を形成する。その流れは烏泊山と箱ヶ森に挟まれた盛岡市北の浦付近において急激に流路が狭められ、その狭窄部を抜けて北上平野に流れ込む。零石川北岸および南岸ではその地質が大きく異なり、零石川北岸には、岩手山起源の大石渡岩屑なだれ堆積物を基盤とした火山灰砂台地（滝沢台地）が広がっている。その範囲は滝沢市北部から盛岡市北部まで広範囲に及んでいる。

零石川南岸には、零石川の流路転換によって運ばれた土砂で形成された沖積段丘が広がっている。零石川は、これまでに何度も流路を変えており、零石川南岸に広がる沖積段丘の形成に大きな影響を及ぼしている。この沖積段丘は、水成砂礫層を基底とし、その上層に水成シルト、さらに表土が覆っている。このシルト層は旧河道などの低地形ばかりではなく、微高地上にも堆積している。これは沖積段丘が、河道の定まらない零石川の下刻によって周辺山地からもたらされた砂礫やシルトによって形成され、何度も堆積が繰り返されたことによるものである。零石川の旧河道は幾筋も確認されており、大きなものは4条、その他にも網目状に細かな旧河道が沖積段丘に広がっている。現在は圃場整備や宅地造成が進み、旧地形を留めているところは少なくなっているが、航空写真などを見ると、旧河道の流路が残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できるところもある。

3 歴史的環境

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、市街地から北東へ約20kmの萩川字外山に小石川遺跡が所在する。山間部の小河川に臨む台地上にあり、旧石器時代終末期の珪岩製尖頭器や黒曜石製の石核、剥片などが多数出土している。また、岩洞湖を隔てた対岸には細石刃と細石刃核が採集された大橋遺跡が位置する。

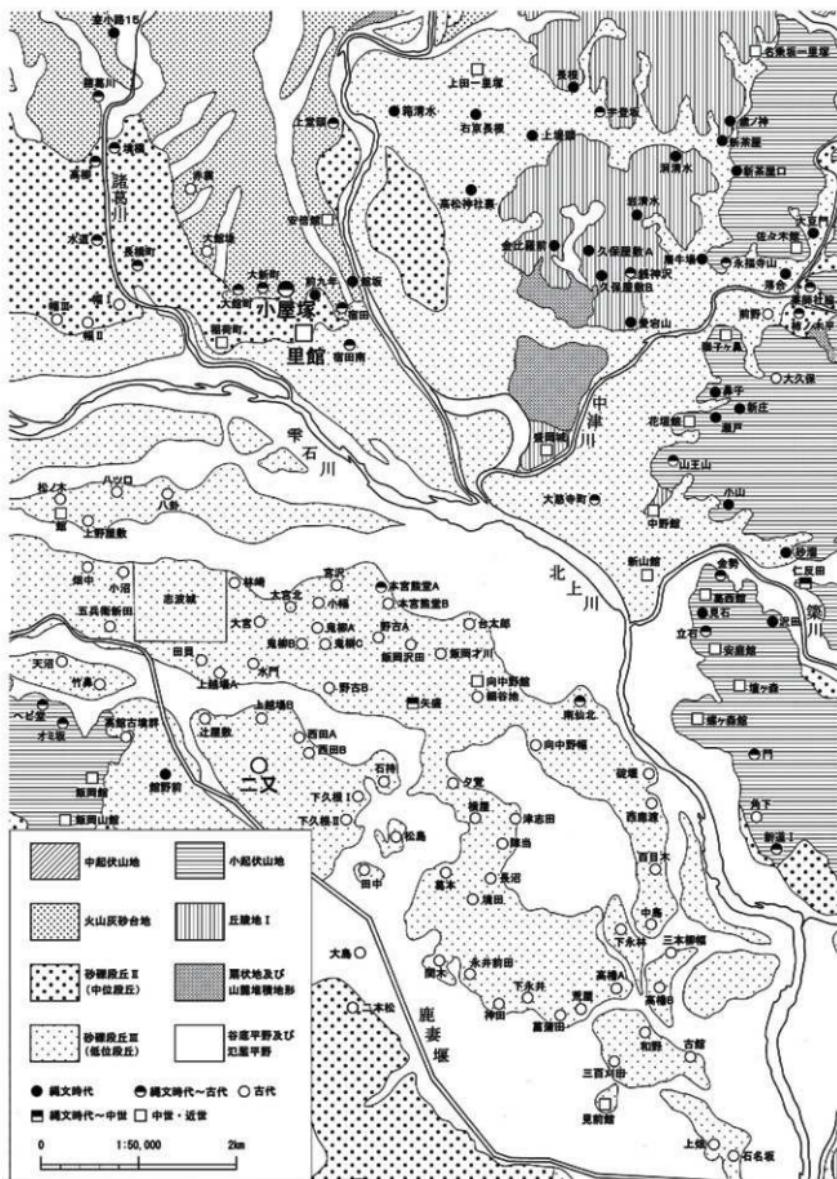
縄文時代 滝沢台地上に立地する大新町遺跡・大館町遺跡・安倍館遺跡からは、縄文時代草創期の「爪形文土器」が出土している。滝沢台地上には後続する縄文時代早期の遺跡が数多く存在し、前述の3遺跡以外にも大館堤遺跡・館坂遺跡・前九年遺跡・宿田遺跡などで縄文時代早期初頭～末葉の土器が出土している。

縄文時代前期は日本列島全体で温暖化が進み、遺跡数が増加し大規模な集落が出現する時期である。しかし、盛岡周辺に限っては北上山地内に散見するのみで遺跡の数は少なく、上八木田I遺跡・畠遺跡などで確認されている程度である。これは、約6,000年前に起こった岩手山の山体崩壊による自然災害の影響が関連していると考えられている。

縄文時代中期になると遺跡数は爆発的に増加し、零石川南岸の沖積平野を除く広い地域に分布する。繁V遺跡・大館町遺跡・柿ノ木平遺跡・川目C遺跡・湯沢遺跡など、主要河川の流域や山麓の扇状地状の地形などに大規模な拠点集落が営まれるようになる。

縄文時代後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。柿ノ木平遺跡や大葛遺跡では後期初頭の集落・墓内遺跡や湯壺遺跡では後期から晩期の集落が確認されている。また、宇登遺跡・上平遺跡では晩期の埋設土器や遺物包含層、手代森遺跡では晩期の集落と遺物包含層が確認されている。

弥生～古墳 弥生時代の遺跡数は少ないが、繁VI遺跡では前期の竪穴建物跡と中期の再葬墓が確認されており、浅岸地区の向田遺跡・堰根遺跡では、前期（砂沢式期）や後期（赤穴式期）の土器を伴う竪穴建物跡が確認されている。古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で4～5世紀の北海道系の形態をもつ土坑墓群が確認されている。永福寺山遺跡では後北C2-D式土器と4世紀の土師器が共伴し、薬師社脇遺跡では5世紀の土師器壺、甕、鉢、鐵鏡等の鉄器、管玉等の玉類が埋納されていた。



第1図 地形分類と周辺の遺跡分布

古代 古墳時代終末から奈良時代にかけて、率石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。7世紀前半の遺構・遺物は少ないが、竹鼻遺跡で確認されている。7世紀中ごろには上田蝦夷森古墳群、8世紀代には太田蝦夷森古墳群、高館古墳群などの終末期古墳が築造され、野古A遺跡・台太郎遺跡・百目木遺跡などで安定した集落が形成される。

平安時代になると、803年に桓武天皇の命を受けた坂上田村麻呂によって、陸奥国最北端の城柵志波城が造営された。志波城は陸奥北部地域の経営拠点であるとともに、北方地域との結節点でもあったが、率石川の度重なる氾濫被害などを理由に、811年頃には徳丹城（矢巾町）へ規模を縮小して移転している。その後9世紀中ごろより、陸奥北部の経営体制は鎮守府肥沢城に集約されていく。大宮北遺跡・林崎遺跡・細谷地遺跡・大島遺跡などでは、集落の中に官衙的な掘立柱建物や倉庫群が配置され、石帶具など律令制関連遺物や仏教祭祀的な遺物等が出土するなど、在地の有力者が律令体制を背景に台頭する様子がうかがえる。この時期の集落は沖積面だけではなく、山麓台地や丘陵の斜面部にも拡がりをみせる。

10世紀後半から12世紀までの遺跡は少ないが、大新町遺跡や小屋塚遺跡では、11世紀前半頃の掘立柱建物や竪穴跡と土器が出土している。また、境橋遺跡・宿田遺跡・上堂頭遺跡でも11世紀前半の遺構遺物が確認されている。赤袋遺跡では土器生産工房跡が確認され、竪穴建物跡の窪みを利用した土器焼成土坑からは、数千点に及ぶ11世紀中葉の土器が出土している。これらは儀礼行為に供されたものとみられ、陸奥鎮守府の在庁官人として台頭した安倍氏が前九年合戦の際に拠点にしたとされる、厨川柵・轄戸柵が近くに存在することを裏付けるような調査成果が上がっている。

12世紀の村落や屋敷、居館の遺構は、落合遺跡・堰根遺跡・稻荷町遺跡などで確認されている。また、奥州藤原氏の影響下にあったとされる宗教遺跡も多数存在する。12世紀以降、街道筋や山頂などに経塚が築かれるようになり、内村遺跡では経塚に埋納したとみられる常滑窯産の大甕が出土しているほか、湯塙経塚からは常滑窯産の三筋文壺、一本松経塚からは渥美窯産の壺が発見されている。大宮遺跡では、大溝跡から12世紀末～13世紀初頭のかわらけが大量に廃棄された状況で出土しており、在地勢力拠点が營まれていた可能性がある。

中世 鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で不整五角形の堀を巡らす居館跡や村落跡、宗教施設と考えられる遺構や墓域等が確認されている。向中野館遺跡や矢盛遺跡でも、在地領主の居館跡と考えられる掘立柱建物跡や堀跡が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏、斯波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のものと考えられている。これらの城館跡は丘陵や山頂など見晴らしの良い場所だけでなく、平野部でも、交通の要衝にあたる微高地などに多数築かれている。現在の盛岡城の場所には南部氏の家臣であった福士氏が築いた北館（慶善館）、南館（淡路館）からなる不來方城が存在した。

近世 現在の町並みの形成は、その南部氏の盛岡城築城から始まる。九戸合戦終結後の天正19年（1591）、南部信直は帰還する豊臣軍の軍監浅野長政から不來方城において、この不來方の地に新城を築くよう、積極的に奨められている（『祐清私記』）。その後、慶長2年（1597）から盛岡城の築城は始まり、寛永10年（1633）に一応の完成をみる。石垣補修の発掘調査などにより、盛岡城はその後1～5期の変遷を経て現在に至っていることが分かっている。

II 二又遺跡（第16次調査）

1 遺跡の環境

（1） 遺跡の概要

遺跡の位置 二又遺跡は、盛岡市街地より南西約4.2kmの下飯岡1及び2地割地内に所在する（第2図）。遺跡範囲は南北約250m、東西約300mと推定され、標高は127m前後である。

地形・地質 二又遺跡は、零石川と北上川の流路変換によって形成された沖積段丘上に立地する。零石川は奥羽山脈から東進し零石盆地を形成し、北上盆地へ入る直前に盛岡市繫の北ノ浦付近で流路が狭められる。零石川はこの狭窄地を抜け北上川と合流するまで、南岸に沖積平野を形成する。零石川には大きく4回の流路変換があったことが確認されている。流路が北へ変化してきたことがわかり、網目状に微高地となる沖積段丘が形成されている。この微高地上には、二又遺跡など、多くの古代以降の遺跡が立地する。

微高地の基本層序は、上層から表土、シルト、砂疊層だが、地点により層厚は一定しない。

（2） 歴史的環境

周辺の遺跡 二又遺跡の周辺には、零石川と北上川によって形成された網目状に分布する沖積段丘が発達している。ここには、農耕を基盤としたと考えられる奈良～平安時代以降の集落遺跡が多く分布する。



第2図 二又遺跡の位置 (1 : 100,000)

縄文～古墳時代 この沖積段丘には、縄文時代から古墳時代の遺構遺物は多くない。旧河道に面した沖積段丘縁辺部に、陥し穴状土坑や縄文時代晩期の遺物包含層が、稀に確認される。縄文時代晩期の竪穴建物跡は、本宮熊堂B遺跡や台太郎遺跡などで確認されている。陥し穴状土坑は飯岡沢田遺跡において旧河道沿いに並んで確認されている。

弥生時代から古墳時代にかけての遺構遺物は、ほとんど確認されていない。

古代 7世紀以降、平野の微高地に竪穴建物を主体とした集落が営まれ始める。たけほな竹鼻遺跡（上鹿妻）では7世紀初頭の集落跡が確認されており、農耕集落の嚆矢のひとつと考えられる。政府統治外にあったこの地の人々は、都人から蝦夷と呼ばれた。8世紀には集落域が拡大し竪穴建物数も増加する。これらの集落は政府文獻記録に登場する志波（斯波）村の一部と考えられる。その村長たみしや家長層の墳墓群と考えられる太田蝦夷森古墳群（上太田）や市史跡高館古墳群（上飯岡）などが営まれるのもこの時期である。副葬品に和同開珎や帶金具、勾玉などの玉類、鉄刀や鉄鎌が納められ、村ごとに独立し政府と交易を行い、武力を持ち、地域を統治した部族制社会の族長の姿がうかがえる。9世紀初頭、桓武天皇の命を受けた坂上田村麻呂が志波城（803年・下太田）を造営し、零石川以南が政府統治下におかれたが、周辺集落様相に大きな変化は見られない。その後、徳政相論（805年）を経て、桓武天皇は軍事と造作を停止した。811年頃に文室綿麻呂はとくらんじょう徳丹城（矢巾町西徳田）を造営し、志波城を停廃し城柵機能を移した。9世紀半ば頃には德丹城も廃絶し、軌を一にしたかのように本地域周辺の集落数が増加する。在地勢力を生かし胆沢城（802年・奥州市水沢区）による統治が進められたものと考えられる。10世紀以降、各地に掘立柱建物や竪穴建物による官衙的拠点集落が出現する（林崎遺跡（下太田）、大島遺跡（羽場）等）。

北東北の統治体制が、律令政府から安倍氏・清原氏・奥州藤原氏へと移行する11～12世紀の遺構遺物は多くはない。大宮北遺跡（本宮）、大宮遺跡（本宮）では、堀を伴う拠点集落が見つかっている。

中世・戦国期 中世・戦国期にかけては、堀で囲郭した豪族居館が営まれる（台太郎遺跡（向中野）、矢盛遺跡（飯岡新田）等）。領主層の城館が各地に営まれ、群雄割拠の時代だったと考えられる。

近世以降 戦国時代末期、南部氏は紫波町の高水寺城を拠点とした斯波氏を滅ぼし本地域一帯の権力を握った。盛岡城（内丸）を築城し、城下町を整備し、盛岡藩を統治した。二又遺跡周辺は、盛岡藩飯岡通に区分され、農村地帯が広がった。周辺各遺跡では、掘立柱建物跡や水路跡などが散見される。

この景色は、昭和30年代まで大きく変化することは無かったが、平成以降に本遺跡北西方向において大規模区画整理事業（盛岡南新都市開発）や本遺跡中央を県道（主要地方道盛岡和賀線）バイパスが開通するなど、周辺環境が大きく変化してきた。

2 調査内容

（1）現況

二又遺跡は、零石川の流路変換によって形成された沖積平野の段丘上に立地する。水田、畑などの農地が宅地の周囲を取り囲む農村地帯である。遺跡中央付近を主要地方道盛岡和賀線が南北に縱貫し、遺跡北方では大規模土地区画整理（盛岡開発）が行われ、交通量が増加するなど、近隣環境が昭和から平成にかけて大きく変化した地域である。

調査区周辺の標高は、およそ 127.5 ~ 127.9 m である。

(2) これまでの調査（第2表・第3図）

二又遺跡では、平成 8 年度から令和 3 年度までに 16 次の調査を実施している。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる主要地方道盛岡和賀線道路改良工事に伴う第 11・12 次調査以外は、小規模な個人住宅建築等に伴う調査である。これまでの調査の結果、本遺跡は 9 世紀半ばから 10 世紀代の堅穴建物跡を主体とした古代集落や近世集落の遺跡である。

(3) 第 16 次調査（第4図）

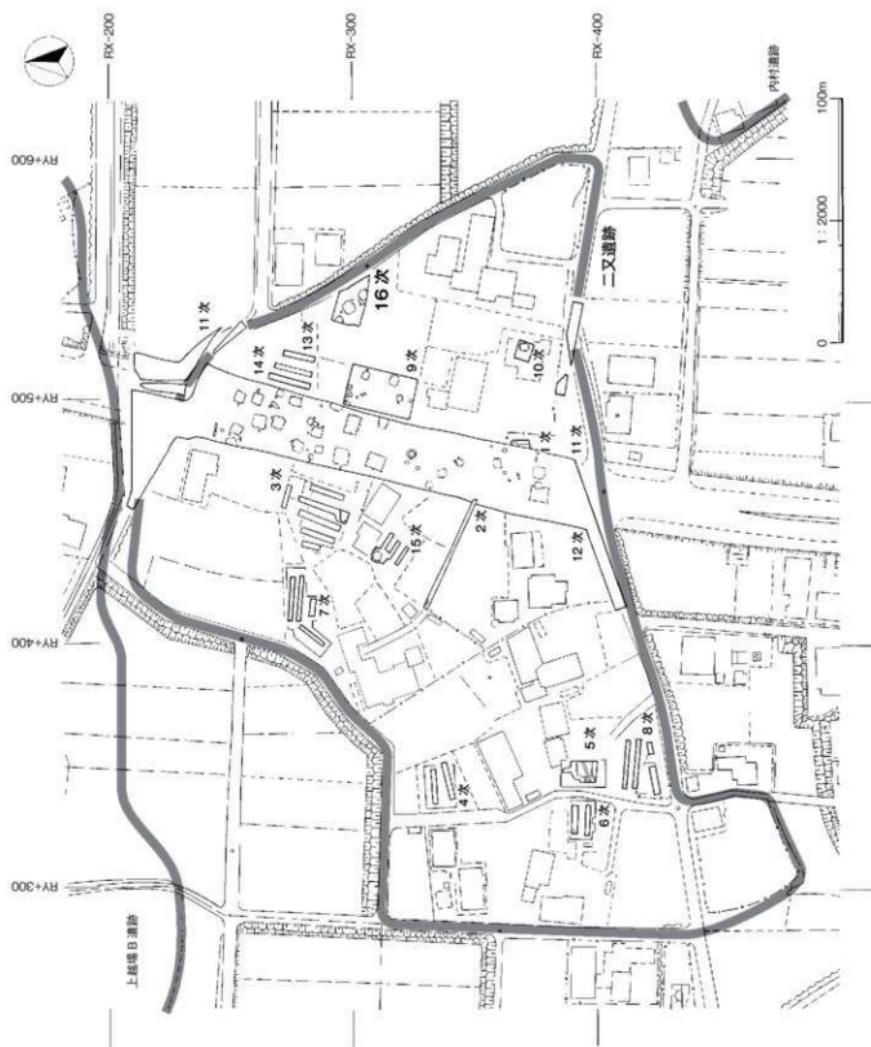
調査経過 遺跡北東部において個人住宅建築工事に伴い実施した。周辺の調査成果から、古代の遺構の存在が想定されたため、令和 3 年 4 月 15 日にトレンチによる試掘調査を実施した。その結果、調査対象範囲の南側に堅穴建物跡 2 棟を検出した。遺構検出面が住宅建築の設計掘削深度よりも浅く、保存措置をとることが不可能であったため、施主や施工業者と協議し、同年 10 月 18 日から同年 12 月 6 日まで、敷地面積 289.49m² のうち、201.4m² を対象に本発掘調査を実施した（第4図）。

調査区の基本層序は、上層から I 層表土、II 層黒色土、III 層シルト漸移層、IV 層褐色シルト層であった。II 層と III 層は耕作による削平を受け、一部にのみ残存していた。遺構検出面は、現地表面から約 50 ~ 60cm 下の III 層もしくは IV 層褐色シルト層上面である。遺構検出面の標高は 127.5 m 前後であり、西から東へゆるやかに傾斜している。

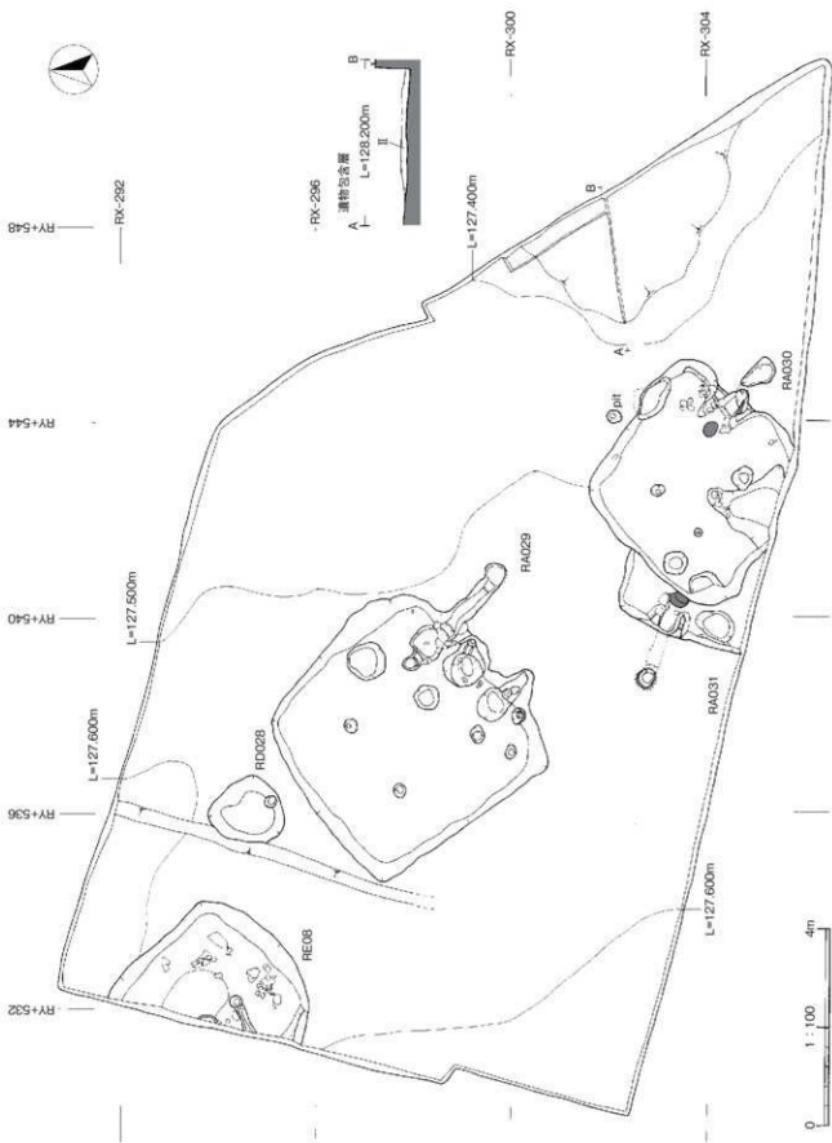
検出遺構は、平安時代の堅穴建物跡 4 棟（うち 1 棟はカマド無し）、年代不詳の土坑 1 基、平安時代の遺物包含層 1 ヶ所である。

第2表 二又遺跡調査一覧

次数	調査主体	所在地 (盛岡市下飯岡)	調査原因	面積 (m ²)	調査期間	検出遺構・遺物
1	盛岡市教育委員会	1 地割 54	個人住宅建築	100	1996.04.03 ~ 05.02	平安時代 堅穴建物跡
2		1 地割 内	配水管敷設	230	1997.11.17 ~ 12.11	平安時代 堅穴建物跡、土坑、溝跡、土師器、須恵器
3		1 地割 49-2	個人住宅建築	98	1999.06.11	平安時代 堅穴建物跡（保存措置）
4		1 地割 83	農作業小屋建築	49.6	2003.04.07	なし
5		1 地割 35-1	個人住宅建築	77.5	2003.09.01 ~ 09.18	平安時代 堅穴建物跡、溝跡、土師器、須恵器
6		1 地割 21-2, 21-6	個人住宅建築	37.5	2004.03.04	平安時代 堅穴建物跡（保存措置）
7		1 地割 44	個人住宅建築	116	2004.04.06	平安時代 堅穴建物跡（保存措置）
8		1 地割 34	個人住宅建築	118	2009.10.26	平安時代 堅穴建物跡（保存措置）
9		1 地割 59-9	個人住宅建築	500	2010.05.06 ~ 06.10	平安時代 堅穴建物跡、土坑・土師器、須恵器
10		1 地割 55-1	農作業用倉庫建築	40	2010.06.04 ~ 06.09	平安時代 堅穴建物跡・土師器、須恵器
11	七 ン 埋 蔵 文 化 財 事 業 團	1 地割 地内	県道道路改良 主要地方道 盛岡和賀線 道路改良工事	3,460	2011.05.06 ~ 08.31 2011.09.16 ~ 10.14	縄文時代 土坑、土器 平安時代 堅穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑 土師器、須恵器、瓦製品、石製品
12				2,830	2012.07.17 ~ 11.01	中世 堅穴建物跡 近世以降 掘立柱建物跡 陶磁器、錢貨、金属製品
13	盛岡市教育委員会	1 地割 56-12	個人住宅建築	28	2015.05.25	なし
14		1 地割 56-13	個人住宅建築	62	2015.05.25	なし
15		1 地割 51-1	個人住宅建替	36	2019.09.17 ~ 09.30	平安時代 堅穴建物跡・土師器、須恵器、あかやき土器
16		1 地割 56-14	個人住宅建築	201.4	2021.04.15 2021.10.18 ~ 12.06	平安時代 堅穴建物跡、土坑・遺物包含層 土師器、須恵器、あかやき土器、金属製品



第3図 ニ又遺跡全体図



第4図 二又遺跡 第16次調査 全体図

(4) 遺構・遺物

R A 029 竪穴建物跡（第6・7図、第4・5表、第1・2図版）

位 置 調査区中央 重複関係 なし 平面形 圓丸方形 カマド方向 E 43° S

規 模 等 平面 4.7m × 4.55m、検出面から床面までの深さ 0.4m。

カ マ ド 南東壁東寄り。煙道は長さ 1.8m、幅 0.3 ~ 0.4m、煙出しあは径 0.4m のピット状。南袖が僅かに壁際に残存。火床面や天井崩壊土など、カマド構造を残す存在は認められない。焚口から煙道入口付近には人為的な堆積を呈する褐色土塊や焼土塊、炭粒が混入する暗褐色土が堆積。その堆積土上の燃焼部南寄りに、長さ 40cm 程の礫が直立状態で出土。両袖推定位置には長さ 15cm 程の礫が据えられ、北側礫の上には伏せて重ねられた坏 3 点とやや西にずれて 1 点が出土し、南側礫の脇には、その上からずり落ちたように伏せた坏が 2 点出土した。廃絶時にカマド構築土や火床面を破壊し、礫や土器を据えた可能性が考えられる。

埋 土 カマド周辺の床面直上には、暗褐色～褐色土塊に炭粒や焼土粒～塊を含む人為的な堆積が広がる。そのほか全体の埋土は、黒褐色～暗褐色の自然堆積土である。

床 面 概ね平坦。土層観察から 2 期以上の構築が想定できる。L 1 層上面が竪穴廃絶時使用面（新期床面）で、カマド周辺の南東側で硬化していた。L 2 層は古期の床構築土である。

ピット 10 口。L 1 層（新期床面）に覆われる古期のピットは 2・6・4 である。L 1 層上面検出の新期（廃絶時）のピットは、1・3・5・7・8・9・10 である。2 と接する南東壁外へ延びる掘り込みは、埋土に焼土が混入せず、底面に浅いピット状の窪みがあり階段状であることから、出入口部の可能性がある。1 の埋土上部には褐色土塊や焼土が堆積し、カマド付近と同様の人為的な堆積である。貯蔵穴にカマド廃絶時の廃土を埋めた可能性が考えられる。10 は 1 の東側の壁をやや外側斜めに掘り込まれている。新期の主柱穴は 3・7・8・10 と考えられ、軸組規模が桁行 10 尺（約 3.0m）、梁行 6 尺（約 1.8m）の、南東辺が切妻構造の小屋組が想定される。各ピットの規模は次のとおりである（深さは床面から計測）。

Pit	径(cm)	深さ(cm)	Pit	径(cm)	深さ(cm)	Pit	径(cm)	深さ(cm)	Pit	径(cm)	深さ(cm)
1	60	50	4	20 ~ 30	25	7	25 ~ 30	40	10	15 ~ 18	35
2	68 ~ 85	30 ~ 45	5	25 ~ 38	15	8	25 ~ 30	16			
3	25 ~ 33	55	6	50	15	9	75 ~ 80	8			

遺 物（第 11 ~ 13 図 1 ~ 40）1 は須恵器の坏、2 ~ 19 はあかやき土器の坏、20 ~ 26 は土師器の坏である。12・13・16・18・19 の底部は静止糸切り切り離し。4・5・15・23 は口縁が打ち欠かれた痕跡がある。9・22・23 は北袖推定位置の礫上に、上から 20・21・9 の順に 3 個体が伏せ重ねられた状態で出土した。23 は、内面にヘラミガキが認められ、口縁の一部が打ち欠かれている。11 は南袖位置の礫の脇から、伏せた状態で出土した。北側同様に礫上に伏せ置かれたが、ずり落ちたものか。クロコ切り離し後、底部ナデ調整されている。5 はカマド火床面の位置から出土した口縁が打ち欠かれたあかやき土器坏である。6 はカマド煙道底面出土のあかやき土器坏で、体部外面に墨書「方」または「万」が認められる。10・12・13 のあかやき土器の坏もカマド出土。18 は A 層出土の柱状高台あかやき土器の坏である。21 はピット 9 から出土した土師器の坏である。底部外面に焼成前に施された「梯子状」刻書が認められる。九字（#）を意識したか、回転糸切りを模したものか不明である。27・28 は高台付坏である。28 の底部外面には刻書「二」のような刻みが見える。29 ~ 34 はあかやき土器甕、35 ~ 37 は土師器の甕である。30 は煙道出土あかや

き土器の壺である。体部外面に橙色土が厚く付着。31はピット6出土のあかやき土器の小型壺である。底部切り離しは回転糸切り。36はC層出土の非ロクロの土師器壺である。輪積痕が顯著で、外面調整に横位平行に規則的なヘラナデが施される。ロクロナデを意識したように見える。38は凝灰岩製の砥石である。欠損して全体は不明だが、断面が長方形の小型砥石と考えられる。39は土錘である。40は棒状の鉄製品である。鐵の茎部や紡錘車軸の一部と考えられる。

時 期 平安時代・9世紀後半

R A 030 穫穴建物跡（第8・9図、第4・5表、第1・2図版）

位 置 調査区南東 重複関係 RA031と重複し新しい。

平 面 形 隅丸方形。南隅は調査区外へ延びる。

規 模 等 平面 3.8m × 3.75m、検出面から床面までの深さ 0.5m。 カマド方向 E 42° S

カ マ ド 南東壁中央。燃焼部から煙道入口は地山削り出し。袖は長さ約 20 ~ 35cm の複数の礫と土器片を芯材として褐色土で構築。煙道規模は長さ 1.16m、幅 0.2 ~ 0.3m の割り貫き式。煙道底面は燃焼部から入口付近で床面より高まり、煙出しに向かって緩やかに傾斜する。煙出し底面は平坦。煙出し掘方は方形基調。煙道内に投げ込まれたように完形の土師器壺（52）や、あかやき土器壺、土師器壺、土師器壺が出土（46・53・66・69・70）。焚き口は、被熱した天井崩壊土の下から、極暗赤褐色焼土の火床面範囲（0.35m × 0.3m）として検出。煙道内やカマド周囲から、礫や土器片が散乱し出土した。

埋 土 自然堆積。床面直上は暗褐色土を主体とし焼土粒～塊を含む。カマド周囲のA層には、にぶい黄橙～灰白色粉状バミス（十和田a火山灰）をブロック状に含む。

床 面 概ね平坦。南側の床面の縮まりが弱く、やや低い。床面中央付近から炭化材が集中して出土。南隅床面から、白色粘土塊が出土。

ピット 7口。1 埋土中に白色粘土塊が混入。7は埋土に焼土を含み、北東壁を抉り袋状を呈する。貯蔵穴か。北東壁外側にピット1口を検出したが、RA030に伴うものは不明。規模は次のとおりである（深さは床面から計測）。

Pit	径(cm)	深さ(cm)	Pit	径(cm)	深さ(cm)	Pit	径(cm)	深さ(cm)	Pit	径(cm)	深さ(cm)
1	40~48	12~18	3	14~18	20	5	50	42	7	50~100	14
2	30~34	6	4	34~60	8	6	20~30	16			

遺 物（第14~17図 41~82） 本遺構からは、今次調査区の他の遺構にはない器種（盤・瓶）が出士した特徴がある（61・62・75）。41~43は須恵器壺、44~51はあかやき土器壺、52~58は土師器壺である。44は、カマド手前床構築土出土のあかやき土器壺で、体部外面に墨痕のような染みが見える。50はあかやき土器の壺で、内面に煤が付着し、外面は被熱による剥離が見られる。灯明器として使用されたか。51・52のあかやき土器壺の体部にも煤が付着。52・53は煙道内から出土。52の上に重なるように66土師器壺が出土。55は土師器壺で、口縁部が打ち欠かされている。体部上部に煤が付着し、体部外面には墨痕のような染みが確認できる。59と共にPit2から出土した。57・58は土師器の壺で、内外面ヘラミガキ調整、内面黒色処理、底部もヘラミガキ再調整される。57は内外面黒色処理、58は内面のみ黒色処理される。58の底部外面にはヘラミガキ後に「×」の刻書がされている。57と同地点の床面東隅出土から出土した61・62は、あかやき土器の盤また大型鉢である。両者とも焼成は良好で二次被熱は認められない。形状や胎土の違いから、別個体と考えられる。59・60はあかやき土器の高台付壺である。59は55土師器壺と

共に Pit2 から出土。63 は須恵器の甕、64・65 はあかやき土器の甕、66～74 は土師器の甕である。65・72 は内面に煤が付着。66・67 は器形が酷似する。66 は煙道から出土し、その下から完形の 52 土師器の坏が出土。67 はカマド南袖芯材の礫と伴に出土。69 の体部外面に橙色～黄橙色粘土が付着。72 は煙道入り口付近から出土。73 の器面色調は朱色が強いが、胎土の発色によると考えられる。75 は、カマド近くから出土した土師器の無底筒型の瓶の破片である。76 は床面東隅出土の軽石製砥石、77 は凝灰岩製砥石、78 は凝灰岩製の小型砥石である。79 は、縁羽口の末端部である。80 は鉄製の刀子茎部、81 は鉄製の刀子刃部と考えられる。82 は鉄製の鎌である。

時 期 平安時代・9世紀後葉から10世紀初頭

R A 031 穫穴建物跡（第8・9図、第4・5表、第1・2図版）

位 置 調査区南東 重複関係 RA030 と重複し古い。

平 面 形 隅丸方形と考えられる。東側を R A 030 に切られ、南側は調査区域外。

規 模 等 平面 2.7m 以上 × 2.2m 以上。検出面から床面までの深さ 0.35 ~ 0.4m。カマド方向 W 22° N

カ マ ド 西壁。袖は削り出した地山の上に褐色土で構築。北袖は礫と土器片を芯材等に利用。煙道は長さ 1.2m、幅 0.3 m の刳り貫き式。煙道底面はピット状の煙出し部に向かって傾斜。検出面から煙出し底面までの深さは約 0.75m。火床面は東側を RA030 に切られるが、赤褐色焼土範囲は 0.4 × 0.3m 以上。

埋 土 自然堆積。A ~ C 層に大別。床面直上に堆積するのは、黒褐色土を主体とする C 層である。全体的に RA030 より褐色土の割合が大きい。

床 面 平坦で固く締まる。

ビ ッ 牙 1 口。カマド南壁際の貯蔵穴か。径 0.6 ~ 0.8m、深さ 0.4 ~ 0.7m。焼土塊や炭片、土器片を含む。

遺 物（第 18 図 83 ~ 93） 83 ~ 85 はあかやき土器坏、86 は土師器坏、87 はあかやき土器の碗または鉢、88 はあかやき土器甕、89 ~ 91 は土師器甕である。83 は、埋土下位から出土した、あかやき土器の坏である。口縁に煤が付着している。86 は外表面にヘラミガキと黒色処理がされた土師器坏である。底面は糸切り後にヘラミガキ再調整と黒色処理がされている。88・89 は、カマド北袖構築土から出土した甕の破片である。88 には、口縁部内面に煤が付着する。92 は穿孔がある土師器もしくはあかやき土器の把手である。ヘラナデ調整。蓋の鉢か把手付土器の把手部か不明。93 は断面四角形の棒状の鉄製品である。

時 期 平安時代・9世紀中葉から後葉

R E 08 穫穴建物跡（第 10 図、第 4・5 表、第 1・2 図版）

位 置 調査区西 重複関係 なし

平 面 形 隅丸方形を呈すると考えられる（西側は調査区外）。調査区内でカマドは検出されなかった。

規 模 等 平面 3.5 × 2.8 m 以上、検出面から床面までの深さ約 0.5m。主軸方向 E 45° S

埋 土 自然堆積。床面直上は黒褐色土を主体とする C 層。壁際は地山由来の壁面崩壊の褐色土塊を含む。最上位 A 層には、にぶい黄橙色～灰白色のバミス（十和田 a 火山灰と考えられる）が含まれる。

床 面 概ね平坦。中央付近は硬化。黒褐色土と褐色土により構築。

ビ ッ 牙 2 口。深さ 0.04m ~ 0.05m。2 つは溝状の掘り込みが備わる。

遺 物（第 19・20 図 94 ~ 102） 94 ~ 96 は須恵器坏である。96 口縁部内外面に酸化鉄状の赤色物が付着。97・98・100・101 は床面から出土した。97 は口縁部が欠損した須恵器の広口壺か。肩部に自

然軸がかかる。隣接のRA029（B・C層）出土の破片と接合した。98は須恵器の大甕である。口縁部が欠損。外面に平行タキ痕、内面には青海波アテグ痕が認められる。99はC層出土の須恵器の瓶（長頸瓶）か。頸～口縁部が欠損。底部に台が付く。体部最大径は肩部より下にあり、外形は球状気味を呈する。体部外面中央に円形の剥離痕があり、把手等が存在した可能性がある。RA030のC層出土破片と接合した。100はあかやき土器の甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し上部につまみ出される。頸部外面に、焼成前の線刻「×」がある。外面の体部最大径部下位に、煤が顯著に付着する。101は非黒クロ成形の土師器の甕である。100と成形方法は異なるが、形状や法量が近似する。102はC層出土の楕型炉底萍である。

時 期 平安時代・9世紀後葉から10世紀初頭

RD 028 土坑（第10図、第4・5表）

位 置 調査区北 重複関係 なし 平面形 不整隅丸方形～円形
規 模 等 平面 $1.36 \times 1.4m$ 、検出面から底面までの深さ $0.3m$ 。
底 面 概ね平坦。壁は直立気味に外傾。 埋 土 自然堆積。
ビ ット 東壁際に1口。径約 $0.2m$ 、土坑底面から底面までの深さは約 $0.2m$ 。
遺 物（第20図103） 103はA層出土のあかやき土器の壊である。摩滅顯著。
時 期 平安時代以降

遺物包含層（第4図）

位 置 調査区東 重複関係 なし
規 模 約 $5.1m$ 以上 \times $2.6m$ 以上。東側は調査区外へ延びる。
状 況 調査区内の低地部である調査区東側において検出したII層である黒褐色土の広がり。 $0.15m$ 程の厚さで堆積。II層内に摩滅した土器片など古代の遺物を包含。
遺 物（第20図104） 104は土師器の高台付壊である。内面黒色処理される。
時 期 平安時代以降

3 調査のまとめ

今次調査は堅穴建物跡4棟（うち1棟はカマド未検出）、土坑1基、遺物包含層1ヶ所を検出した。調査区東端に遺構包含層を検出したことから、遺跡の北東端部に当たると想えられる。

RA029 RA029堅穴建物跡は、カマドのある辺が切妻になる屋根構造で、出入口があったと想定される。
カマド RA029堅穴建物跡は、廃絶時にカマド構築土を破壊し、礫を立て、その上に壊を伏せて重ね置くカマド納めの儀礼ないしは祭祀などが行われた可能性がある。また、RA030堅穴建物跡のカマド周囲には礫や土器が散乱し、煙道内からは土器が投げ込まれたように出土した。カマド廃絶時の作業の痕跡と想定される。本遺跡のこれまでの調査でも、壊の伏せ置き事例などが複数確認できている。（なお、古代の堅穴建物跡のカマド納めの痕跡については、別途検討し報告した¹¹⁾。）
RE008 カマド未検出のRE008堅穴建物跡は、西側の第9次調査区の状況から、カマドが無い堅穴建物跡が集中した範囲の東端部にあたると考えられ、カマドが無い堅穴建物跡の可能性が高い。
土 器 出土土器の特徴を概観する（第3表①～④、第5図）。機種の特徴として、出土破片総数では、

RA029・030・031は須恵器出土量が少なく、RE08は須恵器出土量が一定数認められる(①)。器形は、RA029・030・RE08は壺類出土量が多いが、RA031は甕類が多い(②)。壺類は、RA029・030・031ではあかやき土器が84～85%を占め、RE08は須恵器が43%、あかやき土器が22%、土師器が35%である(③)。RA029・030・RE08の甕類はほとんどが土師器だが、RE08は須恵器を一定量有している(④)。壺の法量比較では大きな差異を見いだせない(第14図)。製作技法には若干の静止糸切りを散見する。高台付壺はハの字に開く高台である。柱状高台は破片1点のみである。以上を踏まえ、先行研究によれば9世紀後半から10世紀前葉におさまる²⁾。また、RE08床面出土の須恵器広口壺(97)は、隣接のRA029のB・C層出土破片と接合した。同じくRE08床面出土の須恵器瓶は、RA030のC層出土破片と接合した。RE08廃絶時に、RA029・RA030がやや埋没していたことがわかる。これらのことから、本調査区遺構群の時期差は大きくないこと、RA029・030・031とRE08は、カマドの有無だけでなく出土土器の器種器形に違いがあり、建物の機能に差があったことが考えられる。

変遷 本調査区遺構群の建物方向、重複関係、埋土の火山灰堆積状況から、次の変遷が想定できる。

RA031 → RA029(古期) → RA029(新期) → RA030・RE08

鉄加工 鉄津(RE08)や羽口(RA030)が出土したことから、本調査区周囲に小鍛冶炉の存在が想定される。

社会 9世紀前葉、志波城の徳丹城移転後に、胆沢城によって斯波郡として統治された本地域内では、それまで集落が営まれていなかった地域にも集落が出現し立地が拡散することが指摘されている。今次調査の建物跡群も、9世紀半ば以降に拡散した集落を構成する建物跡といえる。また、カマド廃絶時の風習なども、この統治体制の変化に伴い流入した可能性が考えられる¹⁾。

第3表 二又遺跡第16次調査 遺構別出土土器総破片分類集計

(今野公顕・佐々木あゆみ)

① 器種ごとの総数と出土比率

	破片総数	須恵器	あかやき土器	土師器
RA029	711	17	24%	349 49.1%
RA030	1208	36	30%	643 53.2%
RA031	440	6	14%	166 37.7%
RE08	75	30 40.0%	13	17.3%
全体	2434	89	3.7%	1171 48.1%
				1174 48.2%

② 器形ごとの総数と出土比率

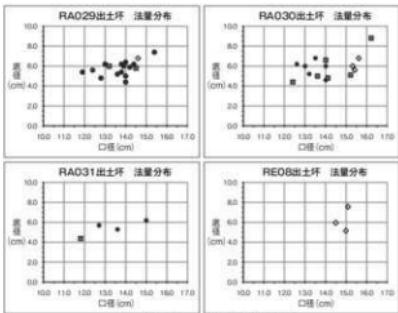
	破片総数	壺	甕
RA029	711	400	56.3%
RA030	1208	649	53.7%
RA031	440	150	34.1%
RE08	75	49 65.3%	26 34.7%
全体	2434	1248	51.3%
		1186	48.7%

③ 壺類の器種分類

壺類	須恵器	あかやき土器	土師器
RA029	13 3.3%	334 83.5%	53 13.3%
RA030	19 2.9%	549 84.6%	81 12.5%
RA031	4 2.7%	128 85.3%	18 12.0%
RE08	21 42.9%	11 22.4%	17 34.7%

④ 甕類の器種分類

甕類	須恵器	あかやき土器	土師器
RA029	4 1.3%	15 4.8%	292 93.9%
RA030	17 3.0%	94 16.8%	448 80.1%
RA031	2 0.7%	38 13.1%	250 86.2%
RE08	9 34.6%	2 7.7%	15 57.7%



(対象は、口径と底径が残存もしくは復元できたもの。)

第5図 遺構ごと出土壺の法量分布図

第4表 二又遺跡第16次調査 土層観察表

遺構名	層名	主要土		含有土			軟硬	密度	その他の含有物
		土性	土色(JIS)	土性	土色(JIS)	状態			
RA029	A1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR3/2	粉	20	中	中-密
	A2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉-粒	5	中	
	B1	SiCl	10YR3/2	SiCl	10YR3/2	粉	10	中-硬	
	B2	SiCl	10YR3/2	SiCl	10YR4/4-6	粒-塊	5	中	燒土粒0.5%
	B3	SiCl	10YR3/2	SiCl	10YR2/3-2/2	粉-粒	10	中	燒土粒1%
	C1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4-6	粉-粒-塊	30-40	中	燒土粒0.5%
	C2	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉-粒-塊	5	中	燒土粒1%
	C3	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/1	粉	5	中	
	C4	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4-6	粒-塊	40	中	
	C5	SiCl	10YR4-6-4/4	SiCl	10YR3/3	塊	50	中	
pit1	J1	SiCl	10YR3/4	SiCl-SL	10YR3/3	塊	10	中	燒土粒-塊5%
	J2	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉-粒-塊	40	中	燒土粒φ3-10mm
	J3	SiCl	10YR3/4	SiCl	10YR4/4	粉-粒	5	中	
	J4	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	燒土粉-粒5%
	J5	SiCl	10YR2/3	-	-	-	中	燒土粉-粒	
	J6	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR2/1	-	5	中	燒土粉-粒φ5-15mm
	J7	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	5	中	燒土粉-粒
	J8	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR2/2	粉	20	中	燒土粉粒塊含、人為
	J9	SiCl	10YR2/3-2/2	SiCl	10YR4/4	粉-塊	40	中	人為
	J10	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粒-塊	30	中	燒土粉粒塊φ3-15-50mm含、人為 燒土粒-塊φ5-15mm40%含、土器 片多量、人為
pit2	J11	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粒	3	中	
	J12	SiCl	10YR5/6	SiCl	10YR2/3	粒-塊	5	中	
	K	SiL-SiCl	10YR3/3-4/3	SiCl	10YR4/6-4/4	粉-粒	10	中	
	P1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR2/2	粉-粒	5	中-硬	燒土浸透
	P2	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉-粒	20	中	
	P3	SiCl	10YR4/3	SiCl	10YR3/3	粉	30	中	
	P4	SiCl	10YR3/2	SiCl	10YR4/4	粒	10	中	燒土粒
	P5	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR3/3	-	30	中	鐵化鉄
	P6	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉-粒-塊	20	中	
	P7	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉-粒-塊	30	中	燒土粒1%
pit3	P8	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	20	中	
	P9	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	20	中	
	P10	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR2/2	粉	5	中	
	P11	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉-粒	30	中	
	P12	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	
	P13	SiCl	2.5YR4/6	SiCl	10YR2/2	粒	30	中	燒土粒
	P14	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/3	粉-粒-塊	40	中	
	P15	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	
	P16	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粒-塊	30	中	
	P17	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR2/2	粒-塊	20	中	燒土(2.5YR4/6)粒、炭粒
RA030	A1	SiCl	10YR3/3-2/3	SiCl	10YR4/4	粉-粒塊φ5-10cm	10	中	燒土粒φ3-15mm10%
	A2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	5	中	
	A3	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉-粒	10	中	
	A4	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR2/1	粉	5	中	燒土粒
	A5	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	5	中	粉狀火山灰(10YR6/4)粉-塊5%

遺構名	層名	主要土		含有土				軟硬	密度	その他含有物
		土性	土色 (JIS)	土性	土色 (JIS)	状態	%			
	B1	SiCl	10YR3.3-2-3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	20	中	中	
	B2	SiCl	10YR2.2-2-2	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	10	中	中	燒土粒
	B3	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	30	中	中	
C1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/2	粉 - 粒	5	中	中		
		SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	10					
C2	SiCl	10YR2.3-2-2	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中		
C3	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	5	中	中		
C4	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/2	粉 - 粒	5	中	中		
		SiCl	10YR4/4	粉 - 粒 - 塵	30					
C5	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	10	中	中	炭	
C6	SiCl	10YR2.3-2-2	SiCl	5 YR3/6	-	20	中	中	燒土 (25YR4/6-4/8) 粒	
C7	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/1	粉 - 粒	20	中	中		
		SiCl	10YR4/4	粉 - 粒 - 塵	30					
C8	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中		
C9	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	20	中	中		
D1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/3	粉	5	中	中	燒土 (25YR4/6) 粒 5%	
		SiCl	10YR4/4	粉	5					
D2	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/2	粉	5	中	中		
		SiCl	10YR4/4	粉 - 粒 - 塵	20					
J1	SiCl	10YR2.3-2-2	SiCl	5YR3/6	粉 - 粒 - 塵	30	中	中	燒土	
		SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	10					
J2	SiCl	10YR3/4	SiCl	10YR2/2	粉	5	中	中	天井崩壊土	
		SiCl	2.5YR4/8	粒	1					
J3	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR3/3	粉	20	中	中	燒土	
		SiCl	5YR3.6-4/6	粉 - 粒 - 塵	40					
J4	SiCl	2.5YR4/8	SiCl	10YR2/3	粒	5	中	中	天井崩壊土	
J5	SiCl	10YR2/3	SiCl	5YR4/6	粉 - 粒	10	中	中	流入土燒土	
J6	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2.3-3/3	粉	5	中	中	流入土	
J7	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒 - 塵	20	中	中		
		SiCl	5YR3/6	粉	5					
K	SiCl	10YR4/6	SiCl	10YR2/3	粉	20	中 - 硬	中 - 密		
L1	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉 - 粒 - 塵	30	中	中		
L2	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉	20	中	中		
M	SiCl	5YR2/4	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中	火床面燒土浸透層	
P1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒 - 塵	20	中	中	白色 (10YR8.6-7/6) 結土壤含	
P2	SiCl	10YR2.3-2-2	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	30	中	中		
P3	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR2/2	粉	20	中	中		
		SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	10					
P4	SiCl	10YR2.2-2-2	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中		
P5	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒 - 塵	30	中	中		
P6	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉	5	中	中		
P7	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	40	中	中		
P8	SiCl	10YR2.3-2-2	SiCl	5YR5/6	粒	40	中	中		
P9	SiCl	10YR2.2-2/1	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒 - 塵	20	中	中		
RA031	A1	SiCl	10YR2.3-3/3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	5	中	中	燒土粒 1% 以下含
	A2	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR3/3	粉	30	中	中	
		SiCl	10YR4/4	粉	5					
	B1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	40	中	中	
	B2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	30	中	中	
	C1	SiCl	10YR2.3-3/3	SiCl	10YR4/4	粉粒塊 ϕ 1cm	40	中	中	
	C2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	40	中	中	
	C3	SiCl	10YR2.3-2/2	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	20	中	中	
	J1	SiCl	10YR3/2	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒	20	中	中	
pit1	J2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	-	10	中	中	
	J3	SiCl	10YR2.2-2/3	SiCl	10YR4/4-4/3	粉 - 粒	20	中	中	
	J4	SiCl	10YR2.3-3/3	SiCl	10YR4/4	粉 - 粒 - 塵	40	中	中	炭粒微量含
	J5	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR2/3	粉	5	中	中	崩落土
	J6	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4-4/3	粉 - 粒	30	中	中	
		SiCl	5YR4/6-2.5YR4/6 (燒土)	粉 - 粒	5					
	J7	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4-4/3	粉 - 粒 - 塵	30	中	中	
	J8	SiCl	2.5YR4/6	SiCl	5YR4/6	粉	30	硬	密	火床面
		SiCl	10YR4/4	粉	5					
pit1	K	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR2/3	粉 - 粒 - 塵	20	中 - 硬	中 - 密	
	P1	SiCl	10YR2/3-2/2	SiCl	10YR4/4	粒	20	中	中	炭粒、土器含
RE08	A1	SiCl	10YR3/2	SiCl	10YR6.4-7/3	粉 - 粒 - 塵	3	中	中	粉狀火山灰

遺構名	層名	主要土		含有土				軟硬	密度	その他含有物
		土性	土色 (JIS)	土性	土色 (JIS)	状態	%			
A2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR3/4	粉	1	中	中	中	
	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR3/4	粉・粒	10	中	中	中	
B1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR3 4/4/4	粒	20	中	中	中	
	SiCl	10YR2 2/1	SiCl	10YR4/4	粉・粒	10	中	中	中	
B2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉・粒	30	中	中	中	
	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉・粒	20	中	中	中	
C1	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉・粒	10	中	中	中	
	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中	中	
C2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉・粒	5	中	中	中	
C3	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中	中	
C4	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	5	中	中	中	
C5	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粒・塊	5	中	中	中	
C6	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉・粒・塊	40	中	中	中	
C7	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR2/1	粉・粒	10	中	中	中	
	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粒・塊	20	中	中	中	
L1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉・粒・塊	30	硬	密	硬い床	
L2	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉・粒・塊	30	中	硬	中 - 硬	床
P1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粒・塊	20	中	硬	中 - 硬	床
RD028	A	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粒・塊	30	中	中	
	B	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉・粒	40	中	中	
	C	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	30	中	中	
Pit1	A	SiCl	10YR2 1/2/2	SiCl	10YR4/4	粉	5	中	中	
	B	SiCl	10YR2 1/2/2	SiCl	10YR4/4	粉・粒	30	中	中	
包含層	II	SiCl	10YR3 1/2/3	SiCl	10YR5 4/3/4	粉・粒	2	中	中	搬移層混入・遺物・焼土 (25YR4/6) 1%含

第5表 二又遺跡第16次調査出土遺物一覧

番号	国版	写真 国版	遺構名	形態		出土		寸法(cm) [残存値] - (推定値)			表面調整		底面切削	その他		
				区分	器種	位置	層位	残存	器高	口径	体積	底径	外面	内面		
1	I		RA029	壺	环	NW	C	D~底	4.7	(14.6)	(6.8)				回転系切	
2	I		RA029	あかやき土器	环	NE	L	D~底	4.6	(15.4)	(7.4)				回転系切	
3	1		RA029	あかやき土器	环	NE	L	体~底	[2.0]	-	4.6				回転系切	
4	1		RA029	あかやき土器	环	NW	L	底	[1.6]	-	6.4				打ち欠き	
5	1		RA029	あかやき土器	环	カマド	火床前	D~体	-	-	-				打ち欠き	
6	1		RA029	あかやき土器	环	東壁際	床面	D~底	5.4	14.4	6.2				回転系切 増書「1万」か「万」か	
7	1		RA029	あかやき土器	环	Ph1	P	D~底	4.2	(13.8)	(5.4)				回転系切	
8	1		RA029	あかやき土器	环	Ph11	P	定形	5.2	13.8	6.2				回転系切	
9	1		RA029	あかやき土器	环	北袖	J	定形	4.3	13.9	6.0				回転系切	
10	1		RA029	あかやき土器	环	カマド	J	D~底	37	(12.4)	5.6				回転系切	
11	1		RA029	あかやき土器	环	南袖	J	D~底	4.6	(12.8)	4.8				ナゲ再調整	
12	1		RA029	あかやき土器	环	カマド	J	D~底	40	(11.9)	5.4				静止系切	
13	1		RA029	あかやき土器	环	カマド	J	D~底	4.3	13.0	6.2				静止系切	
14	1		RA029	あかやき土器	环	NE	C	D~底	4.5	(14.0)	4.4				回転系切	
15	1		RA029	あかやき土器	环	NW	C	体~底	[1.9]	-	5.2				回転系切 打ち欠き	
16	1		RA029	あかやき土器	环	NW	B	D~底	4.2	(14.0)	(5.0)				静止系切	
17	1		RA029	あかやき土器	环	SW	B	D~底	4.0	(13.6)	(5.2)				回転系切	
18	1		RA029	あかやき土器	环	NW	A	底	[2.1]	-	6.4				静止系切	柱状高台
19	1		RA029	あかやき土器	环	NE	A	底	[1.8]	-	(6.6)				静止系切	
20	2		RA029	土器類	环	NE	L	D~体	-	(16.1)	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ			
21	2		RA029	土器類	环	Ph9	埋土	底	[1.0]	-	5.8				回転系切 底面削字(楊子状)	
22	2		RA029	土器類	环	北袖	J	D~底	4.9	(14.5)	5.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ		回転系切	
23	2		RA029	土器類	环	北袖	J	定形	41	132	6.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ		回転系切	打ち欠き
24	2		RA029	土器類	环	NW	C	底	[18]	-	(4.8)	ヘラミガキ	ヘラナデ(黒色処理)			
25	2		RA029	土器類	环	SW	C	D~底	52	(14.0)	(6.4)	ヘラミガキ	ヘラナデ(黒色処理)		回転系切	
26	2		RA029	土器類	环	SW	C	D~底	6.0	(14.2)	5.9	ヘラミガキ	ヘラナデ(黒色処理)		回転系切	外面スス付着
27	2		RA029	あかやき土器	高台付环	カマド	J	体~底	[2.2]	-	7.9					
28	2		RA029	土器類	高台付环	カマド	J	底	[2.3]	-	-		ヘラミガキ(黒色処理)	ヘラミガキ(黒色処理)		底面削字「二」か
29	2		RA029	あかやき土器	要	Ph6	P	D~体	-	20.6	20.6	ヘラチズ→	ヘラケツリ			

番号	国版	写真 国版	通称名	形態		底土	残存	寸法(cm)[残存値] - (標準値)			剖面調整	底面切削し	その他		
				区分	器種			位置	層位	部高	口幅	体幅	底径		
30	2	RA029	あかやき土器	甕	縦造	J	口~体	-	(22.8)	-	-	ヘラケズリ	ヘラナダ	外縁部唇色土付着	
31	3	RA029	あかやき土器	甕	Pt6	P	口~底	11.7	11.6	12.0	6.6	-	-	回転系切	
32	3	RA029	あかやき土器	甕	NE	C	口~体	-	(24.0)	23.7	-	ヘラケズリ	ヘラナダ		
33	3	RA029	あかやき土器	甕	NE	C	口~体	-	(21.6)	22.3	-	-	ヘラナダ		
34	3	RA029	あかやき土器	甕	NW	C	口~体	-	(15.6)	-	-	-	ヘラナダ		
35	3	RA029	土器器	甕	Pt6	P	体~底	[87]	-	-	-	11.4	ヘラナダ→ ヘラケズリ	ヘラナダ	
36	3	RA029	土器器	甕	NE	C	口~体	-	(21.6)	21.3	-	-	ヨコナダ→ ヘラケズリ	ヘラナダ	輪縁痕跡著
37	3	RA029	土器器	甕	NE	B	体~底	[16.0]	-	-	9.2	ヘラケズリ・ヘラナ ダ	ヘラナダ	ヘラナダか	
38	3	RA029	石製品	砥石	SE	L	長[31]	幅2.2	厚1.5	-	-	-	-	箇の茶塔跡車輪か	
39	3	RA029	土製品	土鍬	NW	A	長(4.2)	幅1.8	厚1.8	-	-	-	-		
40	3	RA029	土製品	鉢状	NW	床面	長(6.1)	幅1.2	厚1.5	-	-	-	-		
41	4	RA030	須恵器	环	カマド前	L	口~底	5.4	15.3	6.0	-	-	-	回転系切	
42	4	RA030	須恵器	环	カマド前	L	口~底	4.6	(15.4)	5.6	-	-	-	回転系切	
43	4	RA030	須恵器	环	NW	C	口~底	5.0	15.6	(6.8)	-	-	-	回転系切	
44	4	RA030	あかやき土器	环	カマド前	L	口~底	4.8	(13.0)	(6.0)	-	-	-	回転系切 外面に墨痕か	
45	4	RA030	土器器	环	カマド北	床面	口~底	4.9	(14.0)	4.6	-	-	-	回転系切	
46	4	RA030	あかやき土器	环	縦造	J	口~底	4.9	(14.0)	6.0	-	-	-	回転系切	
47	4	RA030	あかやき土器	环	カマド北	床面	定形	4.7	13.2	5.2	-	-	-	回転系切	
48	4	RA030	あかやき土器	环	SW	D	体~底	[24]	-	6.0	-	-	-	回転系切	
49	4	RA030	あかやき土器	环	NE	D	口~底	4.4	13.5	6.8	-	-	-	静止系切	
50	4	RA030	あかやき土器	环	SW	B	口~底	4.9	(12.6)	6.2	-	-	-	回転系切 内面スッペ付着、表面斑剥離、證明器か。	
51	4	RA030	あかやき土器	环	SE	A	体~底	[30]	-	6.5	-	-	-	回転系切 内面スッペ付着	
52	4	RA030	土器器	环	縦造	J	定形	4.5	14.0	6.6	-	ヘラミガキ (黒色処理)	ヘラミガキ	内面スッペ付着	
53	4	RA030	土器器	环	縦造	J	口~底	5.0	(14.1)	4.8	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転系切	
54	4	RA030	土器器	环	カマド	床面	口~底	5.3	(15.2)	(5.1)	-	ヘラミガキ (黒色処理)	ヘラミガキ	回転系切	
55	4	RA030	土器器	环	Pt2	埋土	定形	4.9	13.6	5.0	-	-	-	外面に墨痕。内外面土部スッペ付着、打ち欠き。	
56	4	RA030	土器器	环	NE	C	口~底	5.1	(16.2)	(8.8)	-	ヘラミガキ (黒色処理)	ヘラミガキ	回転系切 滞留観	
57	4	RA030	土器器	环	カマド北	床面	定形	3.6	12.4	4.4	ヘラミガキ (黒色処理)	ヘラミガキ (黒色処理)	ミガキ西溝		
58	4	RA030	土器器	环	SW	B	底	[24]	-	-	ヘラミガキ (黒色処理)	ヘラミガキ (黒色処理)	ミガキ西溝	底面に横縫「×」か	
59	4	RA030	あかやき土器	高台付环	Pt2	埋土	体~底	[4.2]	-	6.5	-	-	-		
60	4	RA030	あかやき土器	高台付环	NE	D	底	[2.2]	-	7.6	-	-	-		
61	5	RA030	あかやき土器	塑	カマド北	床面	口~底	-	(4.0)	-	-	ヘラケズリ	ヘラナダ		
62	5	RA030	あかやき土器	甕	カマド北	床面	口~底	10.5	-	-	-	ヘラケズリ	ヘラナダ		
63	5	RA030	須恵器	甕	NW	B	体	-	-	-	-	平行・凹形アダグ	平行・凹形アダグ		
64	5	RA030	あかやき土器	要	カマド前	L	体~底	[3.9]	-	(6.0)	-	-	-	回転系切	
65	5	RA030	あかやき土器	要	E	B	体~底	[7.0]	-	6.0	-	-	-	ナダ内調整 内面スッペ付着	
66	5	RA030	土器器	要	縦造	J	口~体	-	(17.4)	(18.4)	-	ヘラケズリ	ヘラナダ	67と類似	
67	6	RA030	土器器	要	カマド前	床面	口~体	-	(16.8)	(17.6)	-	ヘラケズリ	ヘラナダ	66と類似	
68	6	RA030	土器器	要	カマド前	床面	口~底	-	(25.0)	(27.6)	-	ヘラナダ	ヘラナダ	摩滅観	
69	6	RA030	土器器	要	縦造	J	口~体	-	21.4	(24.3)	-	ヘラケズリ	ヘラナダ	部外面部唇色土付着	
70	6	RA030	土器器	要	縦造	J	体~底	[10.8]	-	9.7	-	ヘラケズリ	ヘラナダ	ナダ内調整	
71	6	RA030	土器器	要	SW	L	体~底	[4.0]	-	(10.4)	-	ヘラケズリ	ヘラナダ	内面スッペ付着	
72	6	RA030	土器器	要	NE	J	体~底	[19.8]	-	(8.4)	-	ヘラケズリ	ヘラナダ	内面スッペ付着	
73	7	RA030	土器器	要	SE	C	口~体	-	-	-	-	ヨコナダ、 ヘラミガキ	ヘラナダ	赤みを帯びる點土	
74	7	RA030	土器器	要	SW	C	体~底	[15.4]	-	12.4	-	ヘラケズリ	ヘラナダ	本葉袋へ ナダ	
75	7	RA030	土器器	要	NW	C	体~底	[4.8]	-	-	-	ヘラケズリ	ハケメ	無底	
76	7	RA030	石製品	砥石	カマド北	床面	長11.0	幅10.9	厚9.0	-	-	-	-	軽石	
77	7	RA030	石製品	砥石	NW	D	長9.0	幅8.9	厚6.3	-	-	-	-		
78	7	RA030	石製品	砥石	NW	A	長[3.4]	幅3.6	厚2.0	-	-	-	-		
79	7	RA030	土製品	刃口	SE	D	体~末 縦造	-	長(7.6)	(9.6)	(4.1)	-	-	-	
80	7	RA030	土製品	刀子	NW	C	米	(5.9)	幅1.9	厚0.9	-	-	-	-	
81	7	RA030	土製品	刀子	SE	A	米	長(5.3)	幅0.9	厚0.9	-	-	-	-	
82	7	RA030	土製品	鉢	NW	B	切先~ 末	(12.6)	幅1.9	厚1.1	-	-	-	-	鉢
83	8	RA031	あかやき土器	环	SE	C	定形	5.6	13.6	5.3	-	-	-	回転系切	器蓋土器「九」。スス付着
84	8	RA031	あかやき土器	环	SE	A	口~底	3.9	(12.7)	5.7	-	-	-	静止系切	摩滅観

番号	国版	考古	遺物名	形態		出土	残存	寸法(cm)【残存値】-(巻定値)			表面調査		底面切妻	その他	
				区分	器種			位置	層位	都高	口径	体径	底径		
85	8	RA031	あかやき土器	环		検出面	口～底	4.3	(15.0)	-	(6.2)			回転系切	
86	8	RA031	土師器	环	SW	A	口～底	3.3	(11.8)	4.4	ヘラミガキ (黒色処理)	ヘラミガキ (黒色処理)		回転系切	
87	8	RA031	あかやき土器	壺	SE	C	体～底	[9.1]	-	-	-	ヘラナデ		丸底風少	摩滅顯著
88	8	RA031	あかやき土器	壺	北袖	K	口～体	-	(22.6)	(24.0)	-	ヘラケズリ	ヘラナデ		外腹上部にスス付着
89	8	RA031	土師器	壺	カマド	K	体～底	[7.8]	-	10.0	ヘラケズリ 、ヘラナデ	ハケヌ	ヘラナデ		
90	8	RA031	土師器	壺	カマド	J	体～底	[2.1]	-	9.0	ハケヌ→ヘ ラケズリ	ハケヌ	粗面根→ヘ ラナデ	輪積状斑著。スス付着	
91	8	RA031	土師器	壺	NW	C	口～底	19.0	(14.5)	(16.0)	8.7	ヘラナデ	ヘラナデ→ ラケズリ		
92	8	RA031	土師器	把手部		検出面	長[4.0]幅[2.0]厚[2.3]	-	-	-					穿孔1ヶ所
93	8	RA031	食器品	不明		検出面	長[2.1]幅[1.5]厚[0.9]	-	-	-					
94	9	RE08	須恵器	环	NE	C2	不定	4.8	14.5	-	6.0			回転系切	
95	9	RE08	須恵器	环	NE	B	口～底	4.8	(15.1)	-	(7.6)			回転系切	
96	9	RE08	須恵器	环	NE	B	口～底	5.0	15.0	(5.2)	-				内外面上部赤色付着
97	9	RE08	須恵器	広口壺	SE	床面	体～底	[26.9]	-	(27.0)	11.4	平行テクニ カルキメ→ ナデラケ	ヘラナデ	ヘラナデ	自然釉
98	9	RE08	須恵器	大甕	NE	床面	体～底	[35.1]	-	43.8	6.3	平行テクニ カルキメ	青海波アテ グ		
99	9	RE08	須恵器	瓶	SE	C	体	[8.0]	-	16.9	6.0	カルキメ			白付
100	10	RE08	あかやき土器	壺	SE	床面	口～底	-	20.9	21.0	-	ヘラケズリ	ハケヌ		外腹頭部織解「×」
101	10	RE08	土師器	壺	NE	床面	不定	32.5	22.2	21.7	11.4	ハケヌ→ヘ ラナデ	ヨコナデ・ ラナデ	本素面	スス付着
102	10	RE08	鉄道具遺物	橢形片	NE	C		長9.1	幅7.4	厚3.3	重213g				一部ガラス化。磁着微弱。
103	10	ED028	あかやき土器	环		A	体～底	[2.8]	-	-	6.4				摩擦顯著
104	10	混合層	土師器	高台付环		H	底	-	-	-	-	ヘラミガキ (黒色処理)			

1) 今野公綱 2023「盛岡市内の古代堅穴建物跡における「カマド納め」について」盛岡市道路の学び館学芸レポート 6 盛岡市道路の学び館

2) 津鶴知弘 2013「古代「斯波（志波）」郡北部の土器群変遷（その1）」盛岡市道路の学び館学芸レポート 2 盛岡市道路の学び館
津鶴知弘 2015「古代「斯波（志波）」郡北部の土器群変遷（その2）」盛岡市道路の学び館学芸レポート 4 盛岡市道路の学び館

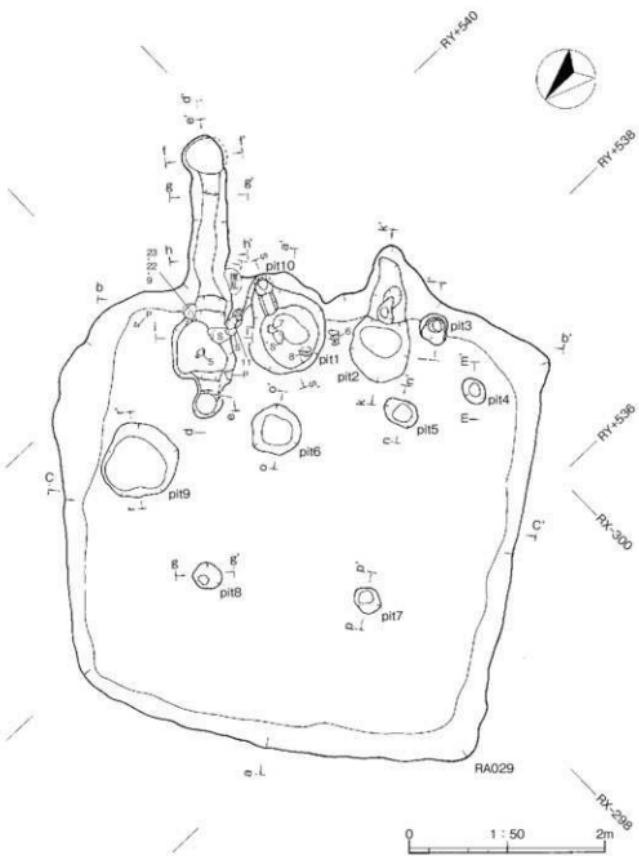
<参考文献>

過年度発掘調査報告

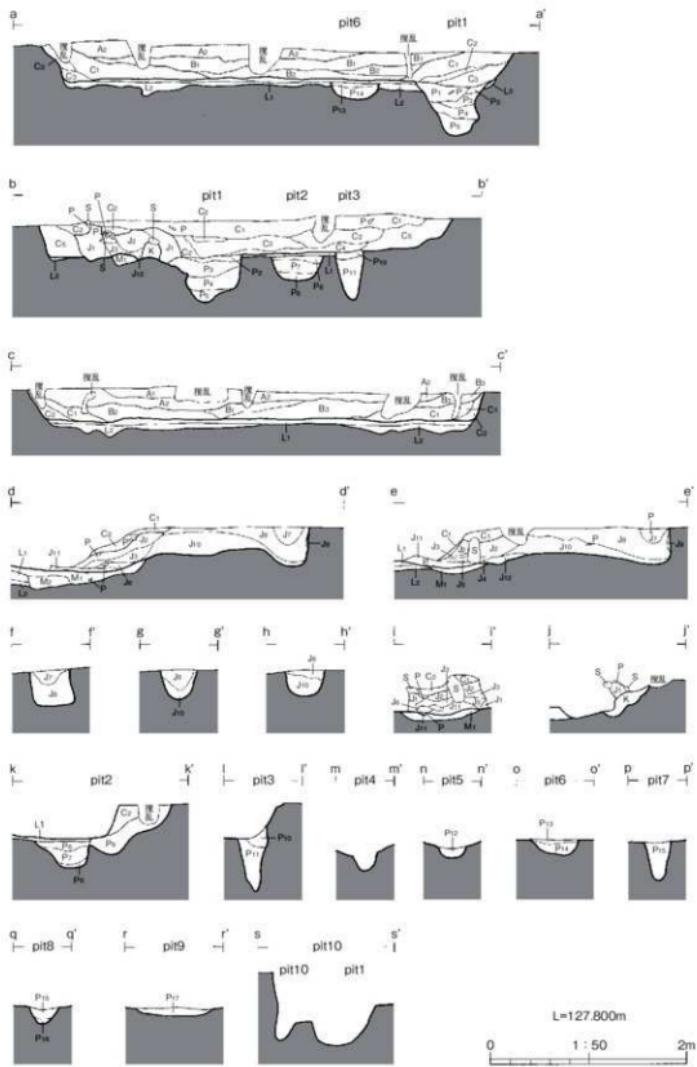
西野修 1998「北上盆地北部の様相」第24回古代城柵官街遺跡検討会資料集

今野公綱 2009「9世紀前半の志波城跡周辺の土器様相」第35回古代城柵官街遺跡検討会

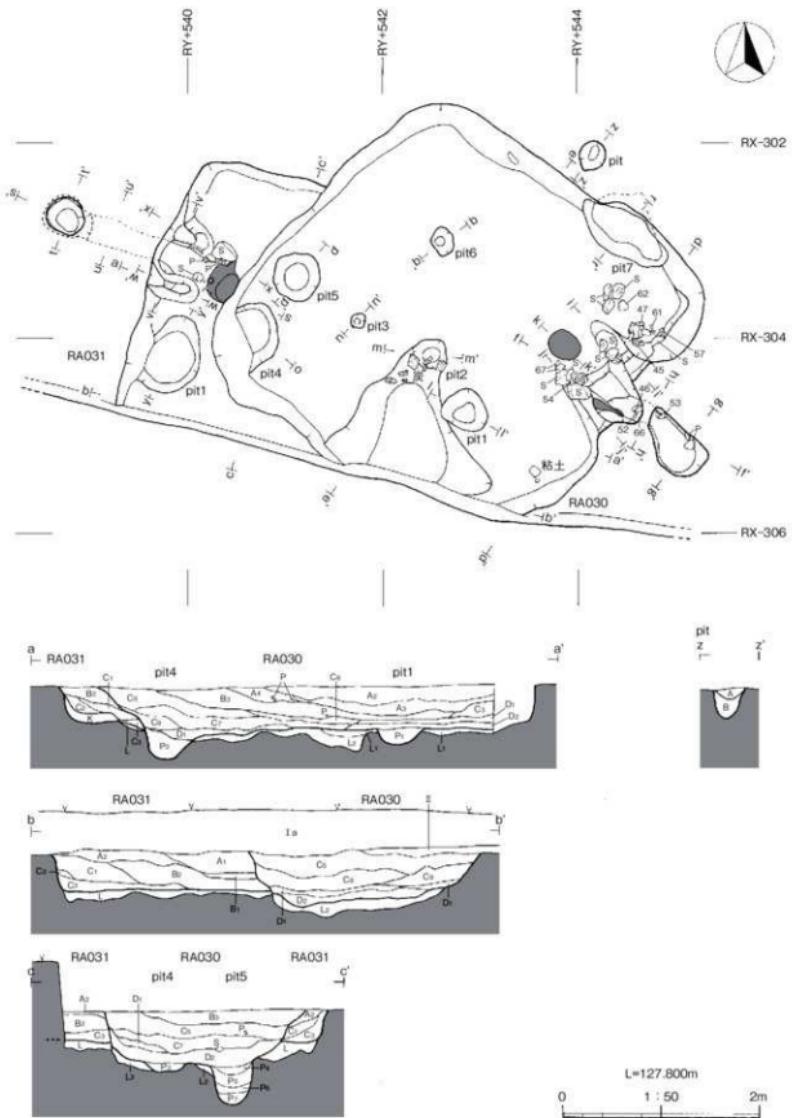
福島正和 2009「9世紀前半の志波城跡周辺の集落様相」第35回古代城柵官街遺跡検討会



第6図 RA029 穴穴建物跡

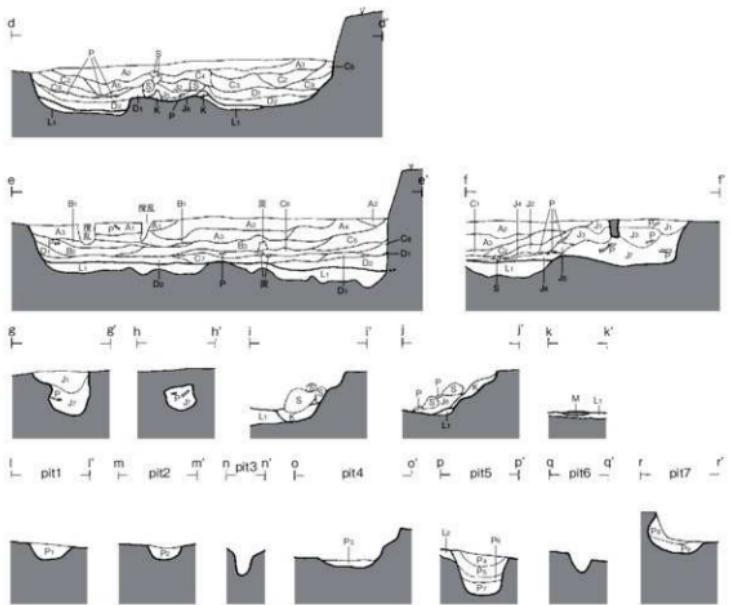


第7図 RA029 壘穴建物跡 土層断面

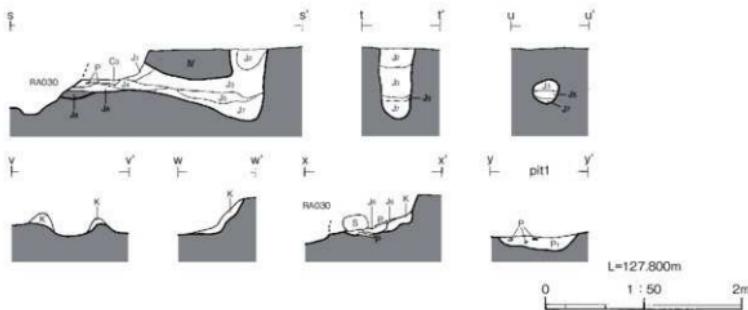


第8図 RA030・031 竪穴建物跡、ピット

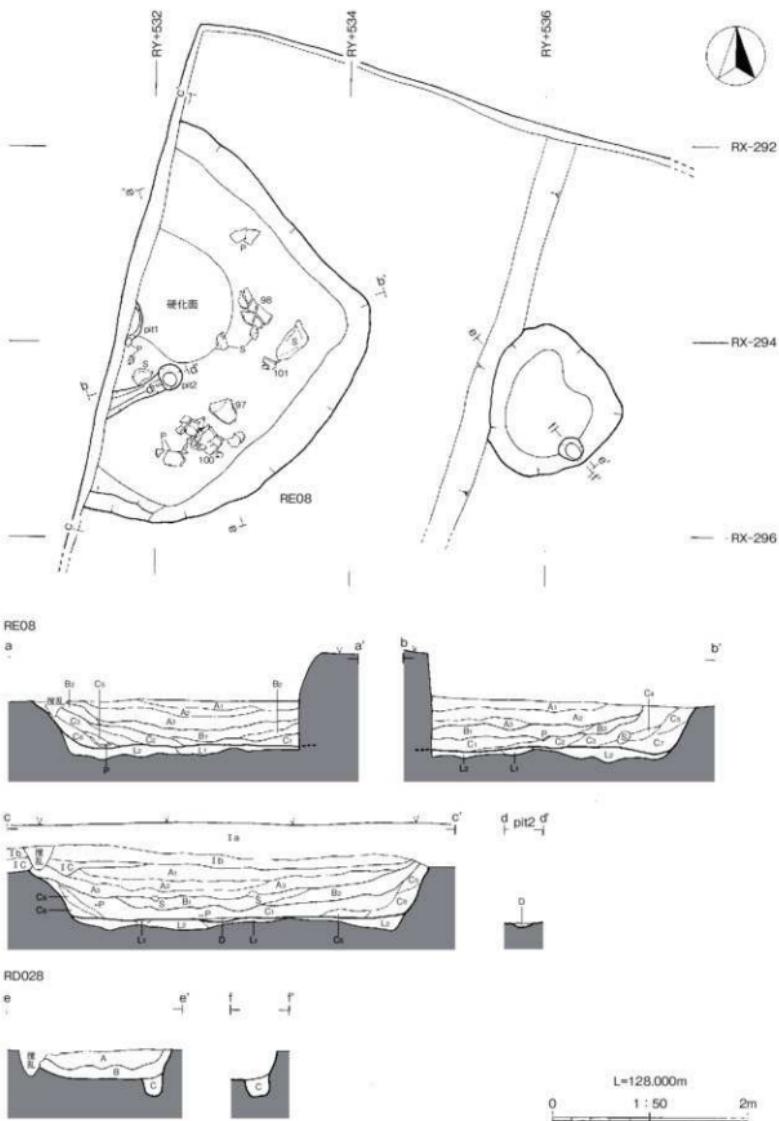
RA030



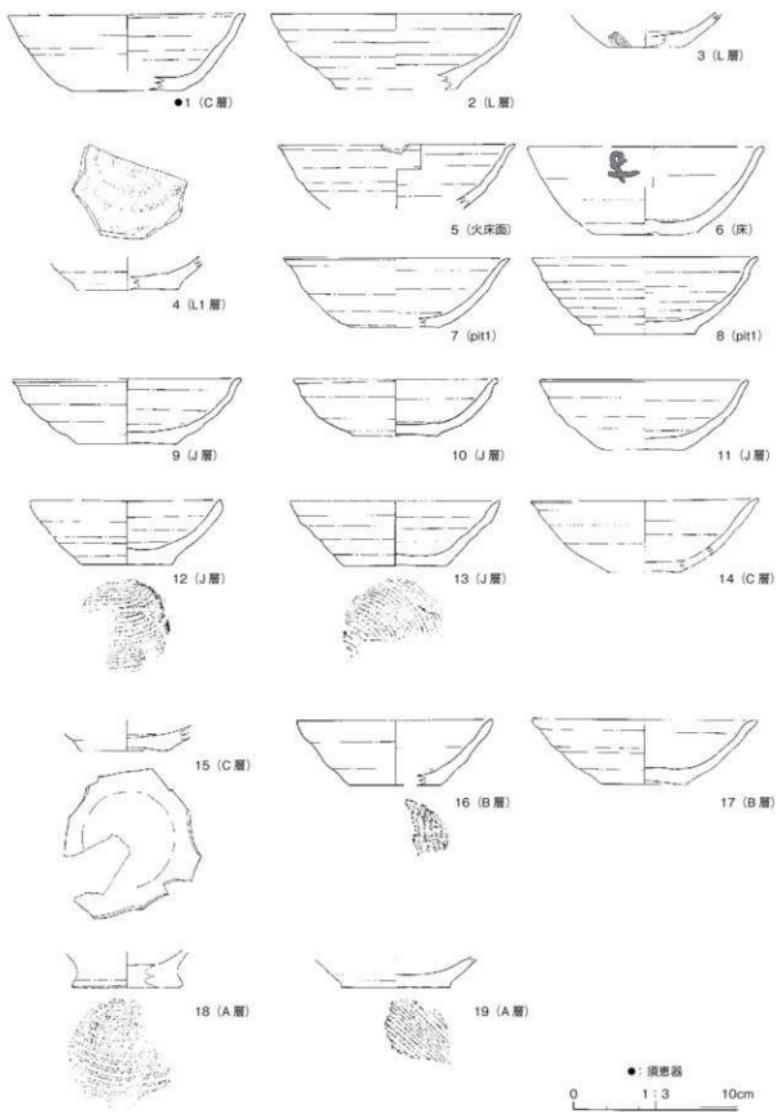
RA031



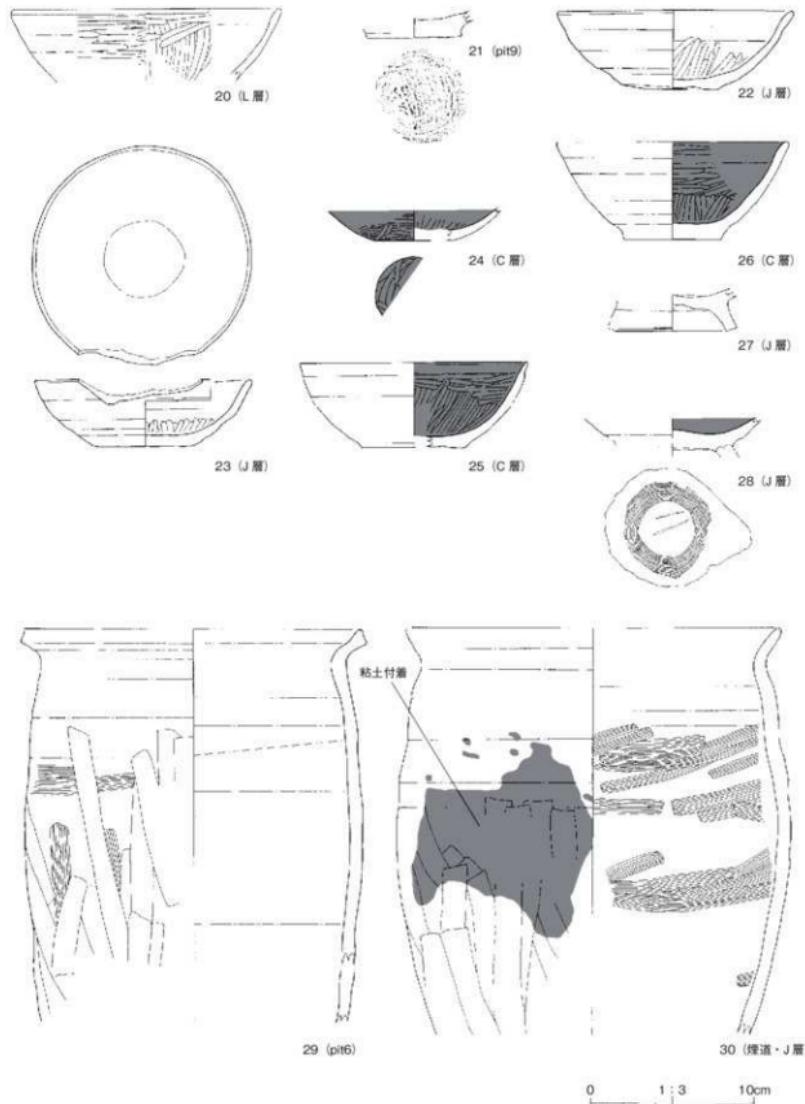
第9図 RA030・031 竪穴建物跡 土層断面



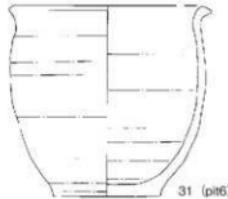
第10図 RE08 竪穴建物跡、RD028 土坑



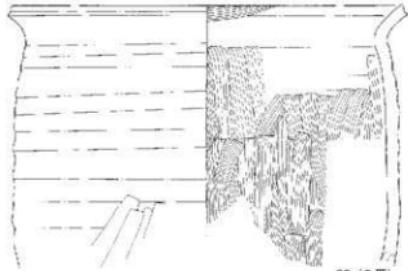
第 11 図 RA029 壺穴建物跡 出土遺物 (1)



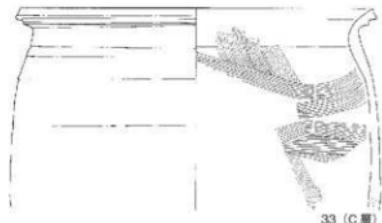
第 12 図 RA029 積穴建物跡 出土遺物 (2)



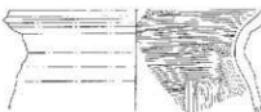
31 (pit6)



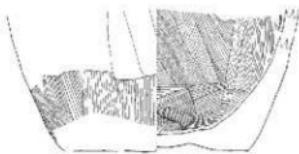
32 (C層)



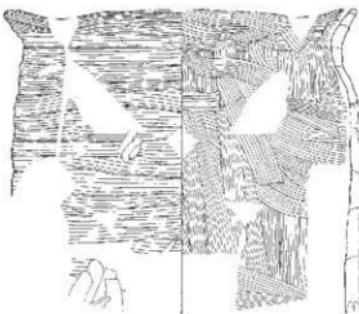
33 (C層)



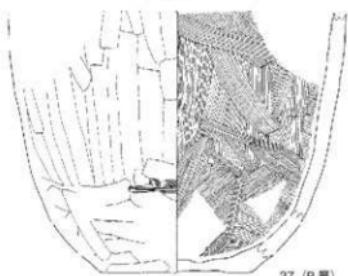
34 (C層)



35 (pit6)



36 (C層)



37 (B層)



38 (L層)



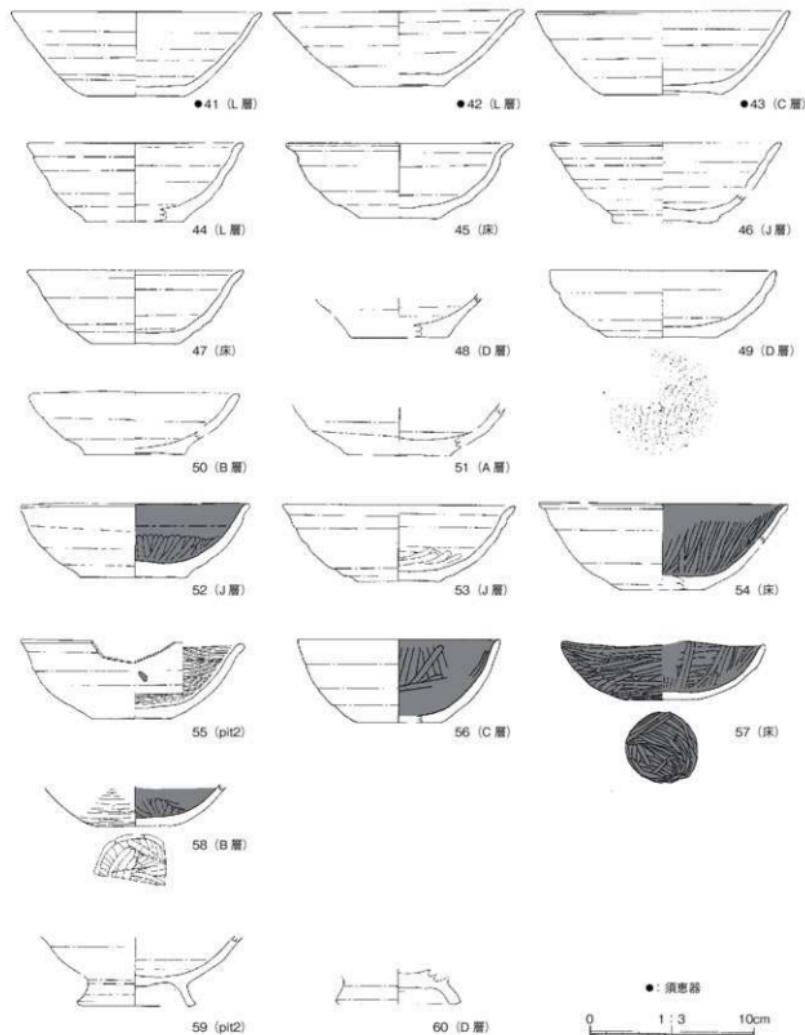
40 (床)



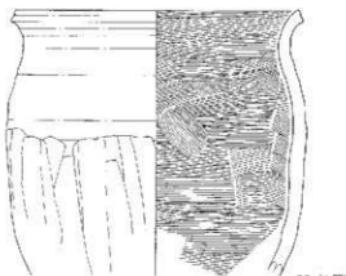
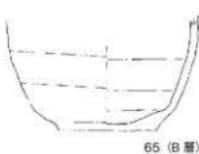
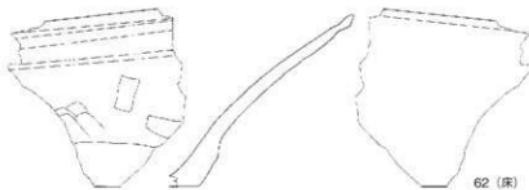
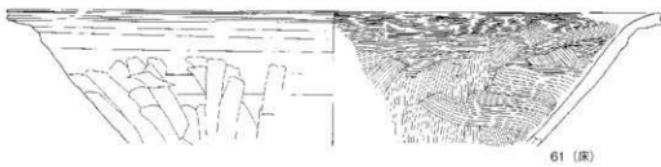
39 (A層)

0 1:3 10cm

第13図 RA029 積穴建物跡 出土遺物 (3)



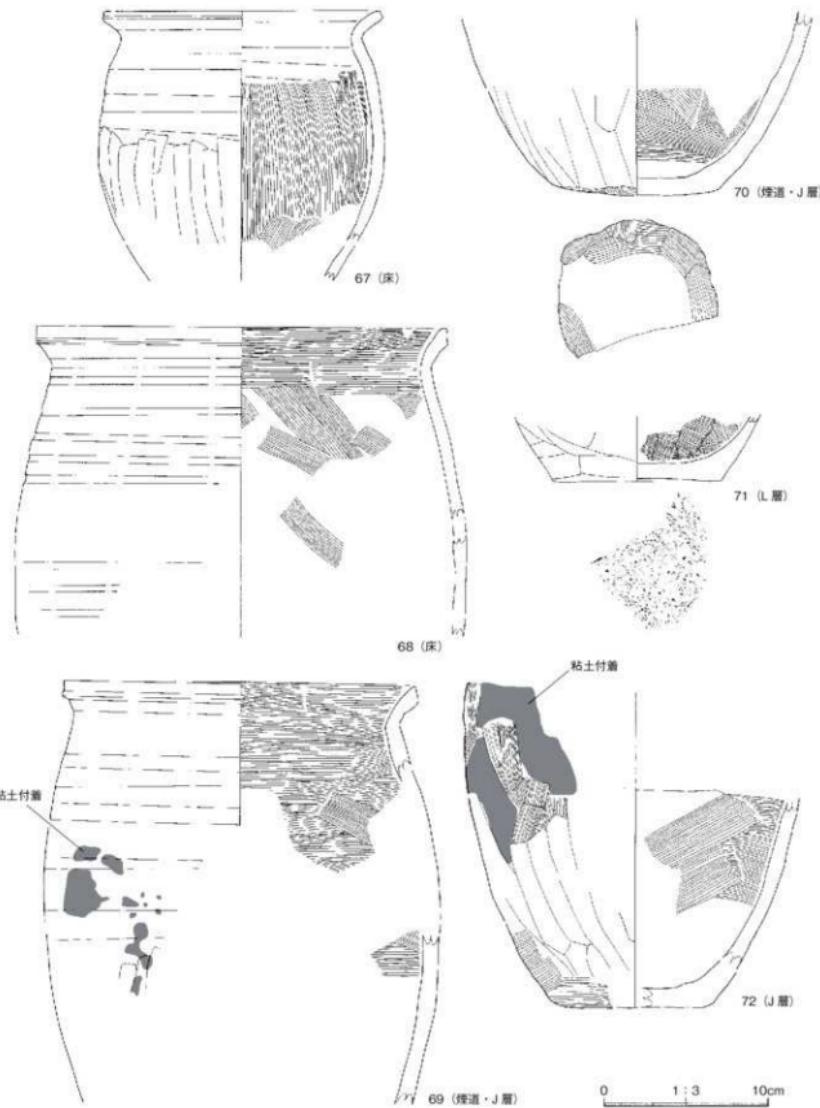
第 14 図 RA030 積穴建物跡 出土遺物 (1)



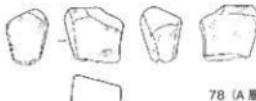
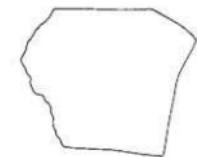
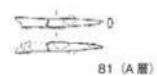
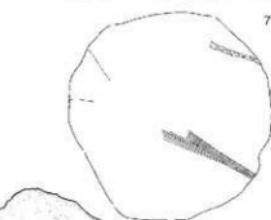
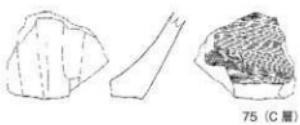
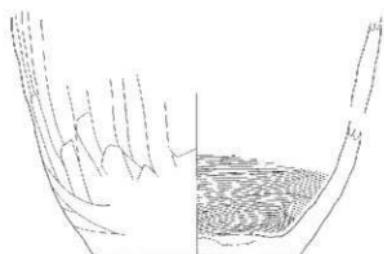
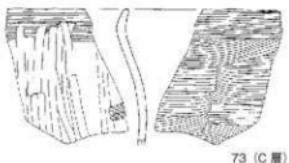
● : 須惠器

0 1:3 10cm

第 15 図 RA030 積穴建物跡 出土遺物 (2)



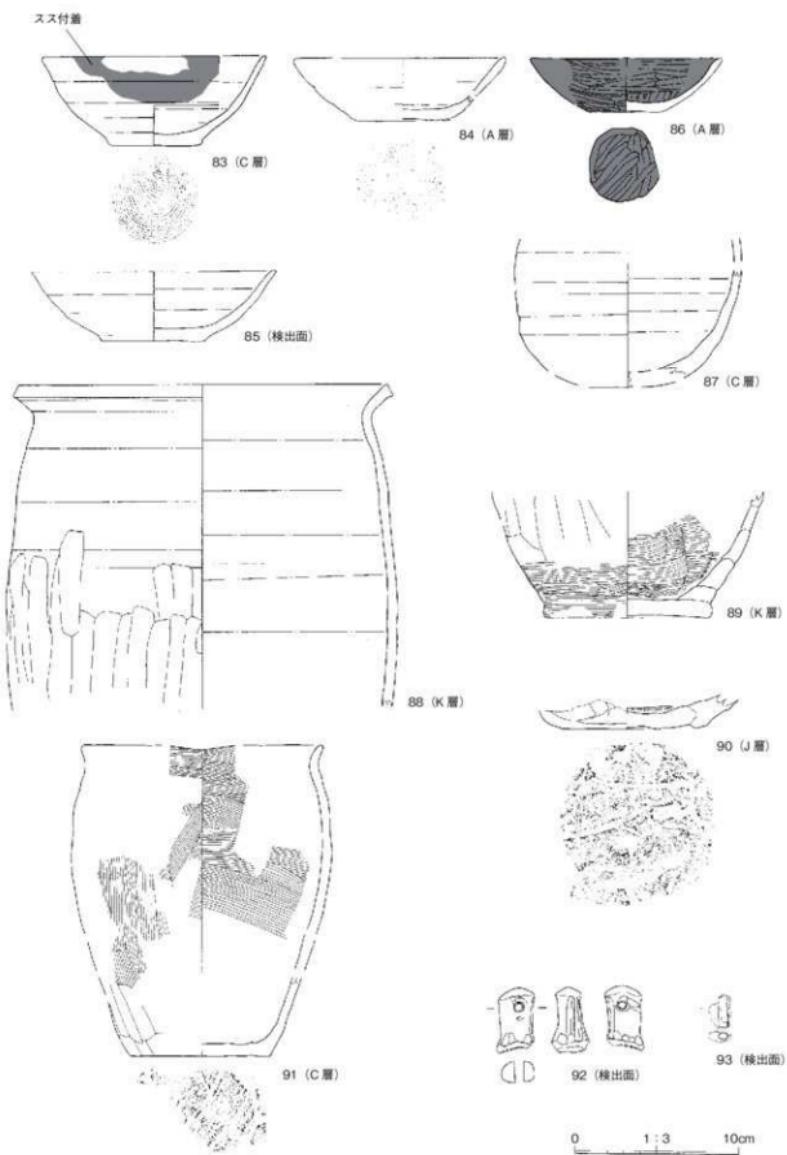
第 16 図 RA030 積穴建物跡 出土遺物 (3)



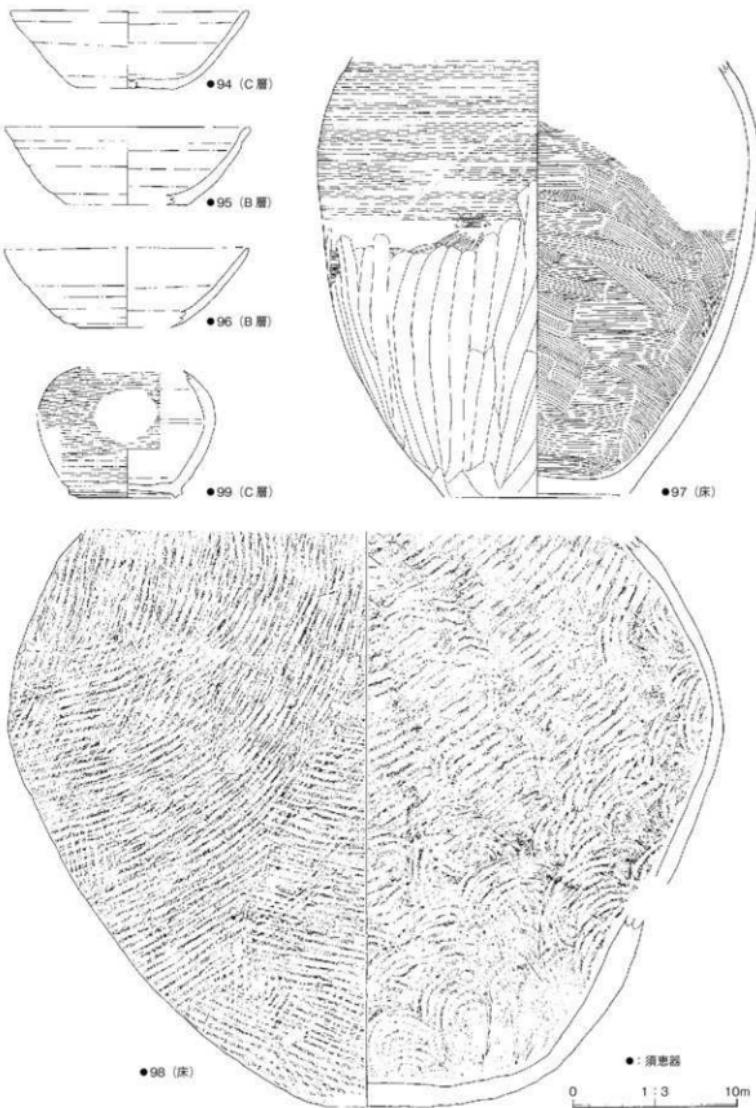
1 : 3

10cm

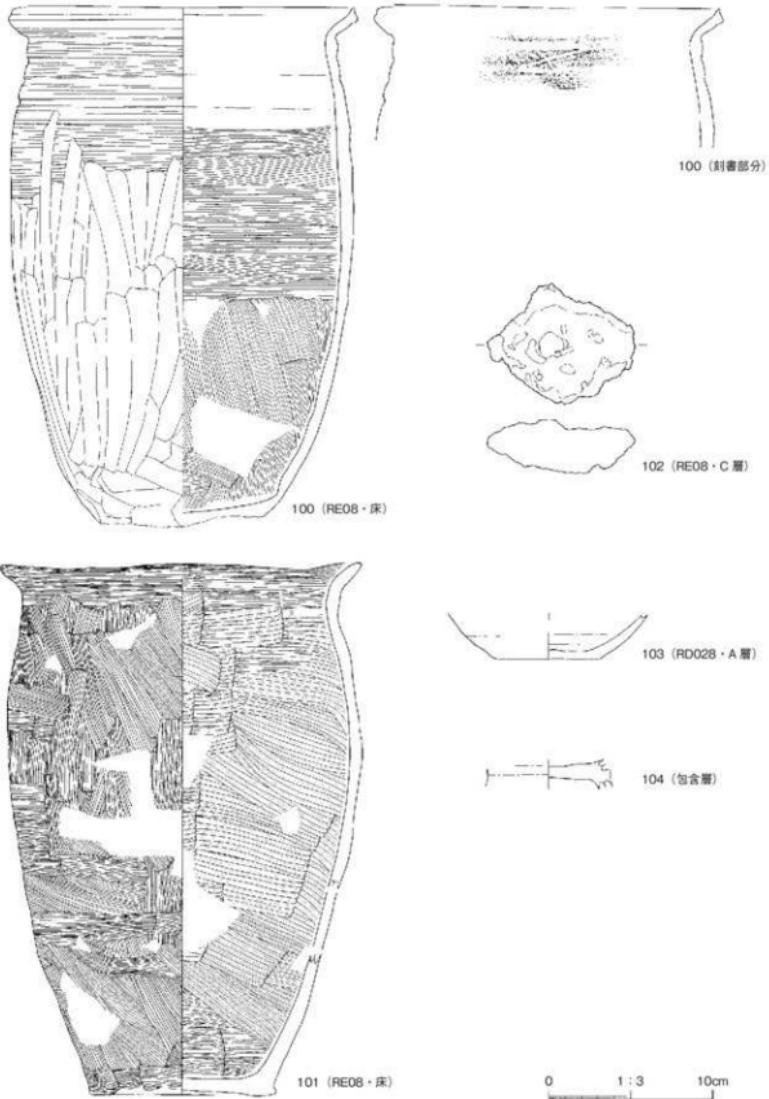
第17図 RA030 積穴建物跡 (4)



第18図 RAO31 竪穴建物跡 出土遺物



第19図 RE08 壺穴建物跡 出土遺物 (1)



第20図 RE08 積穴建物跡出土遺物（2）・RD028 土坑・遺物包含層 出土遺物

写真図版



調査区遠景（南から）



調査区全景（上空から）



RA029 竪穴建物跡（北西から）



RA029 竪穴建物跡 カマド



RA030 竪穴建物跡（北西から）



RA030 竪穴建物跡 カマド



RA031 竪穴建物跡（東から）



RE08 竪穴建物跡（東から）

第2図版



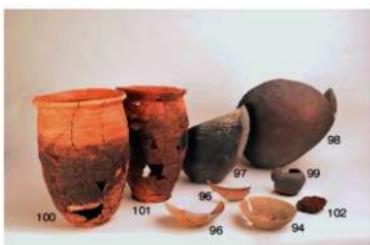
RA029 堪穴建物跡出土土器



RA030 堪穴建物跡出土土器



RA031 堪穴建物跡出土土器



RE08 堪穴建物跡出土土器



土製品・石製品・鐵滓



RA029 堪穴建物跡出土 墨書き土器



RA029 堪穴建物跡出土土器 底面



RA030 堪穴建物跡出土 鐵鎌

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん							
書名	盛岡市内遺跡群							
副書名	令和3年度発掘調査報告書I							
卷次								
シリーズ番号								
編著者名	鈴木俊輝、今野公顕、佐々木あゆみ							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605							
発行機関	盛岡市教育委員会							
発行年月日	2024年3月25日							
所取遺跡名	所取遺跡名	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
	所在地	市町村	遺跡番号	世界測地系				
ふたまたいせき 二又遺跡	岩手県盛岡市 下飯岡1地割 56-14	03201	LE26-0024	39° 40° 30°	141° 06° 53°	2021.10.18 ～ 2021.12.06	201.4	個人住宅建築
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
二又遺跡 第16次	集落	平安時代 時期不詳	堅穴建物跡 遺物包含層 土坑	4棟 1基	須恵器、あかやき土器、 土師器、土製品、石製品、 鉄製品、鉄関連遺物			

盛岡市内遺跡群

—令和3年度発掘調査報告書Ⅰ—

2024年3月25日 発行

編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館
〒 020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13番地 1
TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605

発行 盛岡市教育委員会
印刷 河北印刷株式会社
〒 020-0015 岩手県盛岡市本町通2丁目8番7号
TEL 019-623-4256 FAX 019-623-0976

